

小田原史談

第249号

発行所 小田原史談会
小田原市東町 1-21-18
平倉方 TEL (34) 8363

一本釣り漁師 善さんのひとり語り

話し手 石井 善四郎さん

親父は「亀蔵丸」

おれはまだ現役だよ。昭和八年(一九三三)山王原生まれの八十

三。うちの周りは殆ど石井、隣りの本家は山王原のはじまりの七軒の一軒。



うちは屋号が「芋屋」で、一色に俵屋というのがあって、そのの俵を使つて薩摩芋出荷してた。

漁師はうちの親父の亀蔵からで、うちは半農半漁だった。親父が漁に出ていたのは戦争前からで、船の名は「亀蔵丸」。

お袋はかね。きょうだいは、男が一郎、次郎、甚三郎、それで俺が善四郎。姉さんはやすこ、かおる、とみえ。おれは七人兄弟の一番下つてわけよ。親は二人とも七十台で死んだ。

松林に追い剥ぎ

聞いた話では、関東大震災の時にはお寺(弘経寺)に逃げたそう。そのとき親父の船は自分の家の庭まで流れてきた。お寺は大丈夫だったらしい。お寺のほうはひきい(低い)だしなと思つたらそうじゃなかった。結局浜の土手が低かったんだ。

親父の子供の時分に、その親が漁師だと子が魚を担いで市場へ行くわけだ。そうしんと山王松林に追い剥ぎが出たらしい。魚をペースケ(天秤棒で担ぐ籠)にまとめ市場に持つて行った子供が、帰りに金を貰つて懐に入れてくると、これを狙う追い剥ぎがいた。けつこうやられたらしい。

船は自分の家の下の浜から出してた。あの当時はさ、船はずーと揚がつてたよ。一艘だけじゃねえんだから、他の漁師もいたから、おろすとき順々におろしていく。それで今度は揚げるときも一緒。帰つてくるとお互いに揚げてこしてた。

帆と艫で走つた

学校時分から夏休みは殆ど親父と一緒に漁に出た。

あの当時はエンジンたつて、ろくなエンジンじゃなくて、帆と艫で走つたですよ。風向きによって帆使つたり、そんな時代。

「舟盛り」の格好が三間船(みまぶね)で、だいたい十数メートルぐらいなもんじゃないか。親父が米屋丸(よねやまる)に乗っていたとき嵐があつて、大島の波浮港の入口(親知らず)で遭難した。親父は仲間と港まで泳いだけど、助けられなくて一人亡くなったと聞いたよ。

帆と艫で漕いで魚釣つて、地引で鮪が入つたころだから、あの当

二百四十九号(平成二十九年四月号)

目次

一本釣り漁師 善さんのひとり語り

語り手 石井 善四郎…… 1

小田原の郷土史再発見

古文書が教える「北條五代の人となり」

石井 啓文…… 5

日本最初の歌曲「からたちの花」誕生記

—山田耕筰がめざした日本の歌—

竹村 忠孝…… 10

小田原桐座について(九)

—桐家名跡再興公演をめぐって—

荒河 純…… 14

二宮尊徳と「論語」(一)

寺子屋石塾主宰 岩越 豊雄…… 18

片岡日記 昭和編(九)

片岡永左衛門…… 21

旅のつれづれ俳句日記

剣持 芳枝…… 20

史談会初詣報告

行く先は水川神社と鉢形城址…… 26

「小田原史談会」アンケート結果…… 24

平成二十九年

定期総会・講演会案内…… 17

新入会員紹介…… 9

史談会ホームページ紹介…… 9

特別賛助会員…… 28

落穂集…… 28

時はカツオとかメジとか。今メジの話をしんと、うまくねえとか言うけどね。

おれは(中学の時は)日曜には漁に行つてたよ、今の漁と比べんと戦争中なんかは、漁に行かれないじゃ。だから魚は豊富に来てたよ。

仲間は機銃でやられた船もあるの。古新宿の吉兵衛の船かな。二人で二宮沖まで艦を漕いで行って機銃食らって、そんなこんでみんな沖に行かない。朝のうち地引やったり、地引の中に鮪が入ったりカツオが入ったりシラスが入ったり、そんな当時だから魚はいたよね。

炊きから始めた

自分は漁師のし始めが中学卒業してだった。十六の年から家にいねえんだ。魚釣りが好きなんで、それで「旅」(修業)に出たんだ。自分が旅に出たときは、「親父、俺修業に行ってくるよ」「おお、他人の飯を食って来い」だった。漁師は最初「炊き(かしき)」から始める。飯炊きだよ。初めはみんなそうよ。

ご飯の支度しんに夜中の一時だよ。宵のうちに昔は油を使わしてくんなかった。ケズリッパ(削り端)ってね、薪を鉋で削んだよ。それを夕方支度してく。走っている間に飯の支度しちゃうって漁をやる前に飯を食わしちゃう。それで船方のエサの段取りをしてお

く。代わりがくるまで七年間炊きやった。

地元の人ってのは意外と旅をやりたがらない。我々は旅に出たら一ヶ月は帰ってこないよ。

一番遠い所は伊豆七島だ。三宅、御蔵、八丈、島から島に渡つていく。この魚を釣るにはこの島まで、その先に行くには他の釣りをやる所と、魚の類によつて漁場が違う。

大島で長芋掘り

大島で一週間時化(しけ)をくうことはざらだ。大島の港で長芋掘りやったことあります。鮪船はみんなメカジキの鼻(頭)持つてんの。こういう鼻二本ありゃいいんだ。それで大島は土が少ない。火山灰の長芋つてのは長くないかない、一尺。下はこう曲がっちゃう。だから掘りに楽なんだ。

時化の日は停泊してる船はみんな旅船だ。旅船どうし仲間が出て来てんわけだ。何々丸も来てるつて、だから鮪船なら鮪船の仲間がいてその中に友達がいるわけ。そいつ引つ張りだして、「時化だから行くべえ」。三原山行く人、メジ口を獲る人、おれは長芋掘る人。だからムスビをこせえてやつて、三原山に行くだつて、あとは適当にさ、長芋掘りいくやつは手ぶらで行きやすい。道の土手の傾斜のそこをカジキの鼻でほじれば長芋がある。

薪はね、時化をくうといくんち(幾日)も持たないでしょ。そこで樅の薪を買わうわけだ、当時は油使つてやつてねえから、燃し火。ご飯炊くにあの頃は並大抵じゃねえな。

八丈は上陸しなかつたね。停泊しても、もう時間がねえからね。戦後、我々が行く時分には仲間があそこまで行つたよ。しまいにはマッカーサーラインまで三マイル内、それで西が李承晩ライン。おれは済州島には行つたよ。済州島の鯖。こっちの漁が少なくなつて、いよいよいけなきや済州島に行くかつて。おれは沼津にいたから沼津の二十五トンぐらいの船で行つた。それで済州島に行つたら小田原の船はもう早く行つてたよ。

我々が行つた時には威嚇射撃でおつかなかつた。一週間でけえつて(帰つて)来ちゃつたよ。仲間は狙われて、やられた船もある。

河童の陸上がり

済州島から戻つて、結局は漁が少なくなつちゃつて、もう鮪も駄目サメも駄目だで、一旦は陸(おか)へ上がったよ。河童が陸へ上がっちゃつたようなもんだ。十六から旅に出て二十九で結婚した。その時に陸に上がつてたわけだ。横浜の協和電設、あれに三年いたよ。電話の外線工事。それから工場が十五年かな。そのかわり漁

は自分の船があんから手離さなかつた。だから、日曜、祭日は出て権利はなさなかつた。

それから工場が倒産しちゃうたからおれはすぐに船に戻つた。

魚か命かと

そうだな、五十五ぐらいのときは沼津に三年いたかな。島へ渡つて漁してたから、バリバリの時分じゃねえ。

時化で沼津へ走つたときには怒られた、怒られた。沼津湘南救済会が探し来たんだよ。

時化でるときに二十五馬力の船で海に出た。風速は二十五メートル。式根島からメダイを積んでいて、おれは「メダイ傷んじやいけねえから、この時化突つ走つちゃえ」と走つた。五人乗つててね。ラジオがぶつ壊れちゃつて気圧メーターが下がつてんだよ。だけどラジオ聞いてねえから、場所が分からねえ。気圧がまだとれえ(低くなかつた)から、メーターがまだ高えから、じゃあまだよさそうだ、何とかなんべえつて頭で走つちやつた。

そしたら親方が自分の家から電話かけてきて、九百六十ミリバール、低気圧じゃないよ、台風だよ。そこをおめえ、しやあしやあと走つちやつた。舵、二人がかりだ、新しい船だった。ええかげんな船じゃ潰される。

沼津から救済会の大型船がつ

けて走ってきたよ。それで石廊崎を廻って波勝崎でぶつかつた時にはひどかつたよ。南の風吹いててもう沼津には入れなかつた。そのまんま静浦へ回された。

静浦で一旦おさまって、それで車乗っけてもらつて沼津に行つたら「ちよつと来い」だ。おれと息子が行くと、「こんな天気になんで出でつたんだ。魚が欲しいのか、命が欲しいのか」ときつく言われたよ。まあ、話しりゃきりがねえや。

根物の一本釣り

おれの漁は全部一本釣り。竿一本。漁は「根物(ねもの)」で、二百メートルの海底に泳いでいる魚を釣る。

シロムツにムツ、メバル、カサゴ、アラ。アラのどかいやつでオオガシラ。あと根物じゃねえがタイを釣る。魚によつて釣り方が違う。

釣りは面白れえよ。潮の流れもあんけど、根物でも何か所があるわけだ。まあ、そうだなあ、魚に聞かなきゃ分からねえな。普通だと三ヶ所、多くて十ヶ所ぐれえだ。だいたい陸(おか)の山とおんなし(同じ)で、この山と隣の山と、こつちは食つてもこつちは食わねえ。だから何ヶ所か探しながらそれでこゝで魚が食つたなんてとまた同じとこへ行つてやる。それで食えばそこで決めちまう。食

わねえときは他の場所へ行くと。今は平地はヘドロいっぱいで、やつぱり上がり下がりがある谷のところにいる。

でも、大体いるところは、メートルにしんと二百メートルの深さとか、潮の濁つてんときは百五十メートルぐらい、そういうのはあるんだ。

そうすると、百五十の瀬があるところで、ここが二百で、ここが百五十でと、そういうところがあるんだ。陸(おか)の山と同じでこれ(凸凹)があるわけだよ。

教えてくんねえよ

だいたい魚がいるところはこの溝だよ。マダイの場合はこの頭を急所に棚をキル(測る)。だから魚に教わんなきゃいけない。自分の鉤素(はりす)が十メートルなら、下の高さ、深さに対して計算しなきゃいけない。

それで潮の流れも計算しなきゃいけない。こういうことは自分でね。漁師つてのは手にとつて教えてくんねえよ。見て、それで網をコソ繰る人もこういうふうに切れてる場合、網目の位置、ここからこういうに梳(す)いて行くとここに辿り着く。それで、これだところこがうまくねえな、ここから戻んなきゃいけない、と。

高級魚狙い

おれも体が丈夫なほうじゃね

えから、本当のいい波じゃなきゃ行かない。だから、天気予報は前の晩の気圧の谷とか、等圧線の混み具合とか気をつけて見てる。あれ意外といいよ。

昔はラジオ使つて、沖に出た時なんかラジオも調子が悪くてさ。ラジオぶつ壊したなんて結構あつたよ。

一本釣りでは値段のいいやつを狙いたがるな。アカムツが小田原で獲れる時期がある。今年で一番値がした時にはよ、おれのアカムツで一本一万。沢山獲れねえんだよ、三つか二つだ。目方にしてほしい六百、七百が普通だ。一キロから上つてのはなかなか出ねえよ。

欲がでて、時間的にもう帰えんなきゃいけないえとときに来るやつは一番悔しいよ。

そうだねえ、一本釣りやつてる人はおれとまだ二、三人いるかな。

今はタイとかマダイ、マダイをやつて、カツオとメジが揚がつたり。同じ餌だから、これで二種類、それでイナダが廻るから、同じ餌で。

市場には二百五十日

一年間に市場に持つ

て行くのは二百五十日ぐれえ。そりゃあ釣れた日と市場に出せない日と多少あるけどね。

市場には自分で持つてく。朝は三時に起きてさ、それで早川の港に着いて船を市場に廻すと五時だね。おれは「足」がねえから自転車で行くか、船で廻る。

市場は五時が第一入札、二回目はその後だ、混むから先の入札にかける。釣りじゃあだいたい二、三箱ぐらいでね。市場のナガシ、釣りの場合は五時過ぎだ。支度して荷物を船積んでそれで出かけるのはだいたい六時ごろだ。

小田原は午後の入札がないか



(カッタ: 田中豊)

ら、だから一晩とめなきやいけな
い。釣った魚はちゃんと氷にして
次の朝に市場に持って行く。それ
で三時に起きて市場にもって行
くだよ。

よその港では、旅船の場合は午
後品の入札がある。だから下田な
ら下田行って朝キンメ釣り行く
でしょ。それでそのキンメを夕方
の入札にかける。だから新しいや
つ、その日の魚が動くわけだ。

小田原は一晩とまってんだ。定
置網はそれで処分出来るだ。多え
きや多えなりにここで処分しよ
うと。

今はスーパーが殆ど持つてち
やう。入札かかると魚屋がスーパ
ーに回しちゃう。

ヤリイカで「爆笑」

小田原ではアマダイの時期が
長かった。水温の関係でね、温度
が違あでしょ。だから魚の種類が
変わってる、ここんとこヒラメの
解禁で漁があつていいはずのヒ
ラメが今年はいない。

イカは初島とか真鶴とか、それ
で瀬のうみ、二宮沖、ここはヤリ
イカ、スルメは少ない。でもスル
メも混じんげどね。

我々がこの近くでやるのは、同
じイカでも桜の花が散つて青葉
が出る時分に麦イカ、五月イカ。
あれは今年少なかった。麦イカつ
てのはスルメの子供、それが親に
なるとスルメになる。

鰯は雨降った後、潮の濁った時
には釣りで食う。でも小さいな。
我々が釣っているのは根物のエ
サで釣つてんからでけえだ。鯖と
一緒に食う。

大島の噴火のときは、ヤリイカ
が「爆笑」した(沢山獲れた)よ。
ご祝儀が出ただよ。おれがオオモ
リ(大森丸)の船頭やった時で、遊
漁船にお客乗つけて釣りに行つ
た。あの時は大島の噴火でイカが
逃げてきたから初島のまわりで
とつたわけ。

釣れたといやあ、沼津にいたと
きだ。御前崎の金巢の沖で新場所
(あらばしよ)見つけてアコウダイ
を一日で五百二十貫あげた。これ
が一週間続いた。このときは見事
だったなあ。

山王はおれ一人

ああ、魚の類は減つて来たな、
種類はあつても数がな。今はワラ
サだよ、鰯までいかないよ、イナ
ダとワラサぐれえなもんだよ。

天気が悪けりゃ半日で帰つて
来ちゃう。だいたい二時にはみん
な帰つてきちゃう。みんなが帰つ
てきた時にさ、ずうずうしくやつ
てられないじゃ。

現在はもう自分一人だから荷
物だつて分かりきつてんからね。
そうだなあ、うちへ落ち着くのは、
明日の仕事もして午後の五時頃
になつちゃうよ。

もう小田原もどこもほとんど

遊漁船で、漁でやつてるような船
はねえよ。地元(山王)の船はもう
ないな。もう山王はおれ一人だけ、
相手がいないよ。

おめえ味知らねえかい

二、三日めえ(前)おれ釣つたの、
オタチの二メートル、幅が十五セ
ンチもある。タチモドキ、味はま
じいんだ。前にも釣つたことあつ
て、でけえからと切り身にして焼
いてみたら、美味くねえんだよ。
そういう味知つてんから、おれや
めちやつたよ。

珍しいのはシマガツオのホン
ジマ、本当のシマガツオつてのが
あるんだ。この間おれが二匹釣つ
たんだよ。これは美味いんだ。(刺
身で食べると)もう、うめえ。脂が
のつてるんだ。

それでその話、「なんで殺して
きちゃつたのよ、水族館で探して
る」つて言われたよ。二匹ともゴ
ソゴソで鑑みてえだよ、皮がすご
いだ。鱗なんて剥げないよ。

これが食つて美味いんだ。漁師
の仲間、ホンジマを食つたことね
えんだ。おれがおろして皮をむい
て刺身にしんばつかりに、それで
四つにとつた。それを二枚こさえ
た。それで仲間へ渡したら、

「なんだ、もつとなかつたかよ」

「おめえ味知らねえかい」

「うめえつてことは聞いたこと
あんが、食つたことねえ」

「何やつてんだばか」

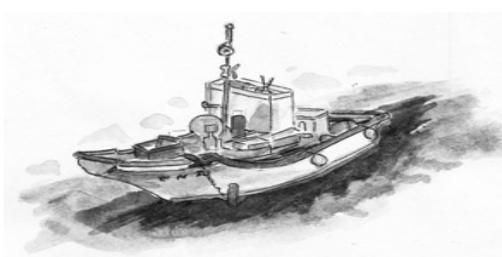
あと二、三年は

子供は二人は片づけたけど、一
人はうちを取つた。一緒にやつて
いた息子は陸へ上がったやつた。
そうだなあ、あと二、三年やり
てえとこだけど、海員免許の書き
換えが五年に一回、こんだのは平
成三十二年。それまではまたねえ
だろう。免許証は沖で保安庁にあ
つたとき、これがなきやいけねえ
んだ。

あと、やれば二、三年やりてえ
と思うんだけどよ。

*二〇一六年十二月六日、小田原郵
便局斜め前「隠れ家ダイニング・J
IRO」(善さんの甥の店)にて。

(聞き手：荒河純・飯田宗男・青木
良一、聞き起こし：松島俊樹、構成：
青木良一)



(カット：田中豊)

小田原の郷土史再発見

古文書が教える「北條五代の人となり」

石井 啓文 ひろふみ

戦国大名の家訓と分国法

伊勢宗瑞の『早雲寺殿廿一箇條』は、家訓とも言われているが疑問視もされている。『北條五代記』(三浦浄心・著)の収載のみで関連史料が見えず、同書が物語本だけに宗瑞作と断定するには至っていない。

立木望隆は宗瑞が語ったことを、息子の氏綱か幻庵宗哲がまとめたのではと推定し(『言問之道』)、宗瑞作とする学者も少なくない。

信州大学人文学部教授で多くの武田信玄の著書がある笹本正治は、同箇條の二・三条を引用して、「これは北条早雲の心がけであるが、おそらく戦国大名の多くは同様の意識で行動していた。特に神仏の礼拝などは武田家でも重要だったろう」(『戦国大名の日常生活』)といい、宗瑞の教えは多くの戦国大名が同様なことをしていたとも言われている。

私は北條家五代に、この教えに準ずる行動をしれば見てきた。

一般的に言われる戦国大名の「家訓」を表1にまとめた。

宗瑞と二代氏綱が最も古い。毛利元就の三子教訓状は、似てはい

るが「三本の矢」の話はない。朝倉宗滴遺話に、よく知られている宗瑞の「儉約話」がある(後述)。家康遺訓も言われているが明治期の作成と発表されている。

『府中市史』(上巻)は、「この『早雲寺殿廿一箇條』は、早雲作とは断定されていないが、これを家訓とし、その他に分国法としての『伊勢宗瑞十七箇條』も制定しているのが早雲の凄いとこころである」と評している。「分国法」とは、戦国大名の領国支配のための法律で、戦国家法・大名壁書などともいう(『広辞苑』)。現代で言えば、国の憲法にも相当するのだらう。通常称されている分国法を表2にまとめた。

『伊勢宗瑞十七箇條』は三島神社への掟とも言われ、分国法ではないとの論評もある。信玄の『甲州法度次第』は、『今川仮名目録』の影響との指摘がある。

『早雲寺殿廿一箇條』と伊勢宗瑞の人となり

『早雲寺殿廿一箇條』は、前文に「昔関東において、早雲寺殿教えの状と号し、小札(小冊子)かあ

り、心おろかなる者は是を読み習ひたり、其文に曰く」として廿一箇條を記している。箇条書きであるが条数はなく「一(ひとつ)何々」である。以下は『北条史料集』の引用で、説明上、文頭に丸数字(第〇条に相当)を示し、読み易く若干送りかなを筆者が付し漢字変換もした。長文のため七項目を抜粋して示す。

①一、第一に仏神を信じ申すべきこと

②一、朝はいかにも早く起べし。遅く起ぬれば召仕ふ者まで油断して、つかはれず。公私の用を欠くなり。さすれば、必ず主君に見限られ申べしと、深く慎むべし

③一、夕べには五ツ(八時)以前

表1 戦国武将の家訓

作成者	名称	成立年(伊勢宗瑞は生没年)	備考
伊勢宗瑞 北條氏綱 島津忠良 毛利元就 武田信繁 朝倉宗滴	早雲寺殿廿一箇條 北條氏綱置文 日新公いろは歌 遺誠十四ヶ條 武田信繁家訓 朝倉宗滴話記	康正2年(1456)~永正16年(1519) 天文10年(1541)5月21日 天文14年(1545)同8年より6年 弘治3年(1557) 永禄元年(1558)4月 永禄3年(1560)カ	『北條五代記』? 勝つて兜の緒を締めよ 47首 三子教訓状とも 99ヶ條 家臣萩原宗俊筆記

表2 戦国武将の分国法

作成者	名称	成立年(伊勢宗瑞は生没年)	備考
伊勢宗瑞 朝倉孝景 大友義長 今川氏親 武田信玄 結城政勝	伊勢宗瑞17箇條 朝倉孝景條々 大友義長條々 今川仮名目録 甲州法度次第 結城氏新法度	康正2年(1456)~永正16年(1519) 文明11年(1479)~文明13年(1481) 永正12年(1515) 大永6年(1526)~天文23年(1553) 天文16年(1547) 弘治2年(1556)	分国法には異論もある 朝倉敏景17ヶ條 17ヶ條、追加8ヶ條 氏親33ヶ條、義元21ヶ條 26ヶ條追加30ヶ條 106ヶ條

に寝しづまるべし、夜盜は必ず子丑(零時から二時)の刻に忍び入るもの也。宵に無用の長雑談、子丑に寝入れば家財を盗られ損亡す。外聞しかるべからず。宵にいたづらに焼捨てず、薪・灯を取りおき、寅の刻(四時)に起き、手水・拝

みし、身なりをと、のへ、其日の用事を妻子・家来共に申付け、六ツ(六時)以前に出仕申べし、古語には、子(零時)に臥し(寅(四時)に起よといへども、それは人によりけり、いつも寅に起きれば徳分がある。辰巳(八時から十時)の刻まで臥ては、主君への出仕奉公もならない。また自分の用事も欠いてしまふ。それで一日が終つてしまへば虚(むな)しいであろう。

⑫一、少しの間(ひま)があれば物の本を見、文字ある物を懐に入れ、常に人目を忍びて見るべし。寝てもさめても手馴れざれば、文字忘る、也。書くこと又同じ事

⑬一、上下万民に対し、一言半句にても虚言(うそ)を申べからず。かりそめにもありのまゝ、たるべし、虚言を言っていると癖になつて、せ、らる、(非難される)也。人にはやがて見限られてしまふ。人に注意されては一期の恥と心得べき也

⑭一、奉公の間(ひま)には馬を乗り習ふべし、下地を達者に乗り習ひて、用の手綱以下は稽古すべき也

⑮一、文武弓馬の道は常なり、記すに及ばず。文を左にし、武を右にするは古来の法。かねて備へずんばあるべからず

既述の笹本正治は、①②③を宗瑞の「心がけ」と言っている。司

馬遼太郎は『この国のかたち』で、②の宗瑞の公私のけじめを「坂東武者の精神」と評している。

⑫は、常日頃の読書・習字の大切さと心得を説いている。普段の修練を怠れば文字を忘れ、書くこともできなくなるといふ。

⑬は、武士は万民に対し一言半句の嘘を言つてはならないと厳しい。真面目で正直、純粹そのもので、宗瑞の人柄であろう。

⑭は、武術について馬術の修練を例にして、乗馬の基礎は熟練者から習い、手綱の捌きなどは自らの練習で習得すべき、と言っているが、宗瑞自身の経験から説いているようにも思える。

そして最後の⑮は、文武両道を兼備すべきは古来からの法と教えている。宗瑞の人となりの一端がうかがえるであろう。

宗瑞が校正した「早雲本太平記」

宗瑞は、⑫で読書の大切さを説いているが、常日頃『太平記』を愛読していたという。それを実証する次の史料には圧倒される。

今川本『太平記』(陽明文庫蔵)は、写本では最も古いと言われているが、その巻一と巻三十九の奥書である(「小田原市史料編」)。

巻一の文意は、甲斐の武田信懸(穴山梅雪の大伯父)が、今川氏親より『太平記』を借りて写本した。しかし、損字落字(誤字脱字)が多い。早雲庵宗瑞は武田信懸と

は膠漆の(極めて緊密で離れ難い)間柄で、平生「太平記」を嗜翫(愛玩)していた。そこで早雲は太平記の諸本を集めて糾明し写本したものを、足利学校の学徒に問い質し、それが返ってくるより更にこれを京都に送り、壬生官務大外記に読み方の加筆を仰いだとし、これを聞いた武田信懸はそれを借用して右筆(丘可)に書写させた、とある。壬生の大外記とは、小槻伊治(川瀬一馬)か壬生于恒(小和田哲男)と言われている。永正二年(一五〇五)の記銘がある。

ただ、史料がこの奥書のみで、足利学校に依頼したものか、あるいは直接同校学徒に依頼したものかは分からない。巻三十九の奥書は判読不能文字も多いが、ほぼ同様のことを記しており割愛した。

それにしても宗瑞の探求心に驚かされる。川瀬一馬は著書「足利学校の研究」で、「早雲と親交のあつた信懸は、これ(早雲の校訂本)を借りて本書(今川本)の筆者に命じたのであるから、本書を今川本と称するのは誤りであつて、

「早雲本」または「北條本」といふべきである。信懸が初めに借鈔した今川氏親の本は、即ち本書とは別本」といふ。宗瑞の校正本を写本したものであるから、「早雲本」とか「北條本」とすべきだと言っている。なお、「陽明文庫」は、五撰家である近衛家の史料を

収蔵した文庫で、京都市右京区にある。

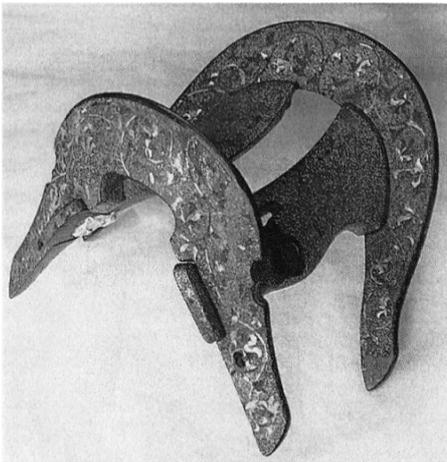
ところで、前記家訓の③は諄(くど)いくらいの理詰めである。とても文系の文章とは思えない。典型的な技術者の論理である。『太平記』の校正も文系的校正ではなく、技術系探求心からの校正に思える。司馬遼太郎は、「宗瑞は鞍作りの家に生まれた」(この国のかたち)と言っている。

北条氏綱作「螺鈿鞍」

北條家の鞍作りについて、慶長期成立の『北條五代記』は、「北條幻庵之事」で「幻庵手にてなす技、物毎に名人と言われる。その時節、伊勢備中守という人、牢人分にて小田原に來た。この人から幻庵は教わり相伝して、馬の鞍をうつ名人になつた。作の鞍と言つて当時の侍衆は皆用いた」と、幻庵宗哲は鞍作りの名人だといふ。

この伊勢備中守を、長塚孝(「馬の博物館」学芸部長)は「伊勢貞辰といい、天文三年(一五三四)に小田原へ移住してきた」と言っている(黒田基樹著「北条氏康の子供たち」)。

また、文禄二年(一五九三)九月奥書の『異本小田原記』も、「伊勢家は鞍の妙工で、宗瑞も幼少より嗜んだ。氏綱は北條を継いだので、細工物に天性の才がある幻庵宗哲に相伝させた」と記している。こうしたことを含めて、司馬は伊勢宗瑞を絶賛している。



菟足神社の氏綱作螺鈿鞍
 (『小坂井町史』口絵より)

菟足(うたり)神社(豊川市小坂井町)が所蔵する唐花唐草文様の螺鈿(らでん)を施した鞍について『小坂井町史』(豊川市小坂井町)が記している。

菟足神社には、唐花唐草文様の螺鈿が施された木製の鞍が所蔵されており、「天文五年(一五三〇三月十日)」という年月日と、「氏綱」の署名と花押が裏面に刻まれている。この花押は明らかに北条氏綱のものであり、天文五年に小田原の北条氏綱の命により作成されたものとみられる。この鞍が菟足神社にある事情は定かでないが、この当時小坂井の領主だったと推測される戸田氏(宗光)と北条氏の繋がりを語る史料も残されているから、北条氏綱が戸田に贈ったものを戸田が菟足社に寄進したか、あるいは氏綱が直接菟足社に寄進したものと考えていいだろう。

氏綱作の「馬の鞍」が寄進されている(写真)。いざれにしても、その氏綱作を菟足社に奉納したのは、戸田宗光と氏綱との交流と推定されている。

戸田を調べると、幕府政所執事伊勢貞親の被官(中世末は、在地領主や土豪の家来で、屋敷地の一部と田畑を分与され、手作りしつ、主家の軍事・家政・農耕に奉仕していた者)広辞苑とある。貞親の実父は伊勢貞国である。貞国の息女が伊勢宗瑞の母である。つまり、貞親と宗瑞母は兄妹(姉弟)である。宗瑞の叔父が貞親で戸田の主君である。戸田と氏綱は、少なからず見えない糸で繋がっているようである。

「伊勢家の鞍づくり」が立証されつつあり、宗瑞や氏綱は技術者であったようである。

宗瑞はこのことに限らず、他資料から「謹厳果断で、文武を重んじた坂東武者の魁」と言いたい。

「勝って兜の緒を締めよ」の名訳、氏綱の人となり

二代氏綱の『北條氏綱置文』は、極めて遺言的であるが家訓と見られている。氏綱は病氣勝ちになると(死去二ヶ月前)に、父宗瑞に做ったのであろう

か、後継者氏康のために五箇條の置文を書いている。

前文は全文を示すが、五箇條は長文のため筆者が要約し、○数字は前記家訓と同様である。

そなたは、この父よりも生まれ勝っていると思えるから、改めていふほどのこともないが、古人の金言名句は耳にしても、往々にして失念することがある。親の書置きと言え、何か心に忘れ難くもあろうから書き残しておく。

①一、大将だけでなく侍は義を専らに守るべきだ。義を違えては例え一國二国切り取っても後の世の恥辱である。人生は僅かの間である。天運つきて滅亡するとも義理を違えなければ末世に後指を指されることはない。歴史を振り返っても義を守っての滅亡と、義を捨てての栄華とは天地格別である。

②一、侍から百姓まで人に使えない人はない。各々の才能によって人は活かして用いるのが偉い大将である。多くの人にうつけ者と言われても、良き働きをする人は必ずいる。人が役に立つのも立たないのも、大将の心がけ次第である。

③一、侍は驕(おご)らず諂(へつ)らわず、分を知るべきである。五百貫の分限で千貫の真似などをしてはいけない。借金が重なりと町人や百姓を踏み倒し、博打までするようになる。当時、上杉家

がそのようであった。分限を守ることを、心得て置くべきである。

④一、万事、儉約を守るべきである。儉約さえしていれば、侍から百姓まで富裕となる。国中が富裕となれば合戦の勝利も疑いない。亡父入道殿が小身より天性の福人と世間に評判されたのも、儉約を守り華麗を好まなかつた故である。

⑤一、手際よく合戦に勝つと奢りの心が出来て敵を侮り、或いは不行儀なことがあるものだ。このようにして滅亡した例は昔から多い。慎むべきである。「勝って甲(兜)の緒を締めよ」といふ事、忘れ給ふべからず
 右、堅く相守れば当家は繁昌するなり
 御判
 天文十年(一五四二)五月廿一日
 氏綱

前文で、嫡子氏康を自分より優れているという心遣いで書き始め、金言名句を借りて説得する手法は、氏綱の人柄そのものである。宗瑞は家臣の侍に説き、氏綱は後継者(大将)に言っている違いはあるが、氏綱の五箇條のいずれもが『早雲寺殿廿一箇條』にはないことである。多分に父宗瑞の遺訓と重ならないよう配慮したのとも思える。

①②は、義を守る大切さを説き、義を守っての滅亡は後世にも恥ないとし、愚か者でも利点に目

を向けよ、という万民を慈しむ大將たる者の心構えを説いているのには脱帽である。

③の分限を守ることで、上杉家の衰退に喩えているのは、上杉氏が関東管領(正確には管領は鎌倉足利家(公方を称した)で、上杉家は其の執事である)を称したこと、家臣までもが驕り怠け、贅沢をしたというのであろう。このことは、宗瑞が二本の杉を鼠が食い倒す夢を見たという話も含んでいようにも思え、興味深い。

④の儉約は、宗瑞は全く記していないが、氏綱が亡父の天性と記すほど、宗瑞が最大の信条としていたことである。越前国『朝倉宗滴話記』(表1の家訓)は、元々武者は黄金などを蓄えたりはしないとして、「但し伊豆の早雲は、針をも蔵に積むほどの蓄えをする。しかし、いざという時は、惜しみなく全てを使う人である」と宗長(連歌師)が常に言っていたとして、朝倉氏の家訓としている(『小田原市史』史料編)。

⑤の「勝つて兜の緒をしめよ」は、氏綱が我が国で最初に言ったとされている。前文で古人の金言名句を記している。漢文の和訳が、我が国最初と理解すれば良いのであろう。名訳文というべきか。

ただ、宗瑞の廿一箇條と氏綱の五箇條の文字数はほぼ、同じである。それだけ氏綱の条文は、宗瑞

以上に理屈っぽく、くどくどしい(掲載文は要約である)。やはり技術者の家育ちというべきか。そして、この二書(早雲寺殿廿一箇條・北條氏綱置文)の教えが、五代に亘って守られていたことが窺われるのである。

三代氏康の信玄への憤りと謙信との同盟文書

前記「置文」を残された氏康は、間違いないこれらを実践している。武田信玄の駿河侵攻を知った氏康の、上杉謙信に同盟を働きかけた永禄十二年(一五六九)正月二日の書翰から、氏康の性格の一端が窺える。『戦国遺文』後北条氏編第二巻から、筆者の読み下し文である。

思い廻らして一筆申し上げるのは、この度、息子氏邦が越後と相模の同盟を申し届けたが、懇切なる御回報をいただき、本望至極である。武田信玄と氏政は長い間親しくして、数枚の誓書も取替わっていたが、忽ちにこれを打破り、昨冬十二月十三日に突然駿府へ乱入、氏真には全くその備がなく茫然自失、遠州掛川へ逃げたのである。私の娘(早川殿)は乗物をも求められない始末で、この恥辱はそそぎ難い。なかならず、今川家の断絶は歎かわしい次第である。この際、上杉氏に頼み入り三ヶ條の約束は証文を以て届

けます。どうか、相州と越後の同盟を願っています。恐惶謹言

正月二日 左京大夫/氏康

松本石見守殿/河田伯耆守殿/上野中務少殿御宿所

(北條氏康書状案寫、歴代古案二)

信玄の一方的同盟破棄による今川氏真と息女早川殿の狼狽振り、後年、早川殿が裸足で逃げた、とも言われた事件の裏付史料である。

氏康が怒り心頭に達して「この恥辱を雪(そそ)ぎ難く候」は分かるが、この後、後継者の氏政夫妻を離縁させ、室黄梅院を甲斐に送り返したことは余りにも短兵急で、冷静沈着と言われた氏康には生涯一度の悔やまれた所置ではなからうか。宗瑞の「虚言を弄してはいけない」、氏綱の「義を守ることを」を信条としてきた氏康には、決して許すことのできない信玄であることは分かる。だが、と言いたい。

四代氏政文書と小田原合戦

氏政は前記黄梅院離縁の時、父氏康に従っているが、氏康が他界した二ヶ月後には武田信玄に働きかけ、再同盟を結んでいる。

氏政は次男で、長子の兄氏親(天用院)が十六才で死去したことにより家督を継いでいる。従って、生まれながらにして嗣子として育てられた氏綱・氏康・氏直と

は若干の違いがうかがえる。

前記、黄梅院との離縁にしても、父に反論することはなかったであろう。既に家督を相続(永禄二年)して九年を経ているのである。反面、氏康他界二ヶ月後には武田家から室黄梅院の分骨を受け、早雲寺塔頭に黄梅院を建立している。さらに、その九年後の天正五年一月、妹桂林院を武田勝頼に嫁がせている。この分骨と桂林院の婚約は、再同盟の条件だったのであろうか。いずれにしても、その後、勝頼にも再同盟を破棄され、桂林院も非業の最期を遂げている。

また、織田信長息女と氏直が婚約し、織田・北條の同盟は十分理解できるが、話が進展しないことに神頼みをしている(『小田原市史』史料編)。当時の神仏信仰は現代人には思い及ばないことではあるが、何故、直接交渉をしないのか(史料が残らなかったのか?)。何かしら、前三代当主に比べて若干気弱な面が垣間見えるのである。

左の文書(『戦国遺文』後北条氏編第四巻)は、天正十七年(一五八九)十一月、秀吉の宣戦布告を受けての家康への書状である(筆者の訳文)。

お手紙拝見本望に候、そもそも今回の様子は案外に候、以前鈴木から氏直が申したことは終始一貫している。しかるべく御取りな

しをお願いする。氏直に表裏のない事は分明であることを伝えて欲しい。年来の約束は悉く皆、貴老の御指図の通りにする。

十二月九日 氏政〔花押〕
徳河殿

(北條氏政書状寫、古證文)

既に、氏直から十二月までには氏政が上洛するとは伝えていた。それが「以前鈴木から申し達した」ことである。これにしても遅いのである。この時、家康は上洛しており駿府にはいなかった。おそらく、この書状が家康に届くのは更に遅れたであろう。

ここに見られるように氏政の心中は和平だっただけかと思ふ。それを、主戦派の弟氏照や氏邦に判然とは言わなかったのではないだろうか。いずれにしても、義を重んずる北條家としては、信長・家康とは結んでも、「成り上がり者」だけではない、秀吉を受け入れられない何かがあったのである。それは兎も角、氏政は敗戦の全責任を負い切腹したが「暗愚」呼ばわれられてしまった。武田再同盟の悲劇、織田との縁組の遅れ、三度目の豊臣との同盟失敗を言つては厳し過ぎるか。ただ、「敗軍の将語らず」で弁解めいた話は全くない。氏綱の「義を守つての滅亡」を心に秘めていたのである。氏照と共に最期は見事とする逸話は少なくない。

小田原合戦と敗戦後の氏直文書

五代氏直は三十歳で病没した。これから人間ができてゆく時である。従つて、確かな人となりは分かり得ない。次の書状(『戦国遺文』後北条氏編第五卷)は、前記氏政書状の一月後、小田原合戦が決定的になつた時、伊達政宗宛に氏直からである(筆者の訳文)。

風聞によると御出陣の様子、よつて使者から申し達します。詳しくご返答いただければ本望である。腹巻一領、兜一剣を贈ります。詳しくは使者月齋が申し述べます、恐々謹言

正月十七日 氏直〔花押〕
伊達殿

(北條氏直書状寫、伊達文書)

内容は月齋の口上に託されており分らないが、氏直自ら伊達政宗の動向を確かめた、と言われる。月齋は、伊達が秀吉に対して共に戦うことを打診したのではないだろうか。ひ弱とも言われる氏直に、戦略的政治力が窺われ興味深い。なお、月齋とは「御家門方」畔(こう)月齋が、伊豆に三箇所合計八拾貫式百八文を領している(『小田原衆所領役帳』)、しかし、その人物の詳細は判明しない。そして、次の天正十八年の文書(『小田原市史』史料編)がある(筆者の訳文)。

この度、葦山籠城戦における活

躍は、大変殊勝である。(北條家が滅んだ今)これから後は、いずれに仕官しようとも全く差し支えない。仍て件の如し

七月十七日
大藤与七殿
(北條氏直朱印狀、大藤文書)

七月五日の小田原合戦降伏後の同月十七日付で、氏直が家臣大藤氏に葦山城での籠城中の活躍を謝した上で、今後はいずれに仕官しようとも差し支えないとしている。あと一通、二日後の同十九日付で、御宿左衛門宛にも忠節を賞する感状がある(『小田原市史』史料編)。

翌二十日、氏直は高野山に向けて小田原を発つている。この期に及んでの感状と家臣契約の解除である。真面目・正直だけで済まされたいだろう氏直の人となりと思うのだが。以上、北條氏は初代伊勢宗瑞の正直で「謹厳果断で文武を重んじた坂東武将」の血を受け継いできたと思う。

新入会員紹介 (敬称略)

氏名	住所
秋山 正雄	小田原市風祭
大久保 正治	調布市布田
田嶋 亨	小田原市中町

小田原史談会のホームページ

小田原史談会といえは会報、史跡巡り、講演会を思い浮かべる方が多いと思います。しかし充実したホームページがあることをご存知でしょうか。

ものは試し、とにかく「小田原史談会」と検索しその扉を開けてみてください。すると次から次へと様々な部屋が現れます。



- ・ぶらり小田原シリーズ
 - ・会報最新号の記事(各記事の最初の頁)
 - ・創刊号から二二五号までの会報目次
 - ・史跡巡りの報告
 - ・講演会の予告
 - ・等々
- 最近、ある歴史関連出版社から次のような話がありました。いい機会ですので付記します。

「日本各地の歴史団体ホームページを見ました。中でも小田原史談会のページが大変充実しているので当社会報で紹介させていただきます」

日本最初の歌曲「からたちの花」誕生記

(作詩・北原白秋 作曲・山田耕筰)

—山田耕筰がめざした日本の歌—

竹村 忠孝

山田耕筰とエドワード・ガントレット夫妻

明治十九年(一八八六)に生まれた山田耕筰は、相場師からキリスト教伝道師となった父謙三とクリスチャンであった母ひさの、四人兄弟の末っ子として東京の本郷で生まれた。六歳頃にすでに賛美歌を英語で歌っていたという。東京の築地に住んでいた時に三番館という屋敷から流れてきたピアノの音をはじめ聴き、美しい音に魅せられた。それが、作曲家になったきっかけである(山田耕筰自伝より)。

そして、十歳の時に父が亡くなった後、長姉の恒(英国人エドワード・ガントレットと結婚、国際結婚第一号)に育てられ、十六歳の時に岡山に暮らし関西学院大学へ入学した。しかし、三年後の明治三十七年(一九〇四)に母ひさが亡くなり、山田耕筰は東京音楽学校を希望して入学し東京で暮らすことになる。



中央・長姉恒(ガントレット夫人)、
後列中・山田耕筰、前列右・母ひさ

本郷中央教会の初代オルガニストであり初代聖歌隊長であったが、二代目の聖歌隊長には岡野貞一(故郷「紅葉」などの作曲者)を指名している。

山田耕筰と滝廉太郎・岡野貞一
山田耕筰は東京音楽学校に入学するとガントレットの薦めで本郷中央教会に通った。そこで、



ガントレット夫妻

岡野貞一との交流がはじまったのだ。本郷中央教会にはガントレットが導入した大きいパイプオルガンがあり、東京音楽学校の生徒達は本郷中央教会に足を運んだ。山田耕筰は明治三十九年にイタリー語を学び、外国の音楽事情に大変に興味を持った。

東京音楽学校では、明治三十六年に亡くなった滝廉太郎の作曲を目指し、明治政府の唱歌推進で行なわれている西欧の曲に日本の詩をつけるものが日本の音楽ではなく、「日本人としての歌曲を作らなければならない。」という思いがあった。中でも山田耕筰は、滝廉太郎が目指した日本人による美しい日本の詩による日本人の作曲という生き方を引き継ごうとした。そして、日本人の歌とは何かを自ら問いかけ音楽への情熱を燃やした。

本郷中央教会の二代目の聖歌隊長であり、山田耕筰よりも八歳年上の岡野貞一は寡黙で敬虔なクリスチャンであった。同じクリスチャンの山田耕筰は岡野貞一の作曲りに滝廉太郎のような日

本人による美しい日本語と日本語のアクセントの音楽の拘りに共感した。

明治四十一年(一九〇八)に東京音楽学校を卒業した山田耕筰は、二年後の明治四十三年に岩崎小弥太の援助を受けドイツのベルリン音楽学校作曲科に三年間留学をした。

その頃に、「春が来た」「春の小川」が「朧月夜」「紅葉」などが日本全国の小学校で唱歌として歌われていた。小学唱歌で日本の美しい自然を歌っている音楽であったが、国の命令で作らされた高野辰之の詩に岡野貞一が曲をつ



前列左端・岡野貞一、前列右端・山田耕筰



中・岡野貞一、
右・滝廉太郎

けた唱歌であった。山田耕筈は、岡野貞一の曲は自然観を詠う日本人の歌ではあるが、詩の内容として叙情的なものとしては物足りなさを感じた。

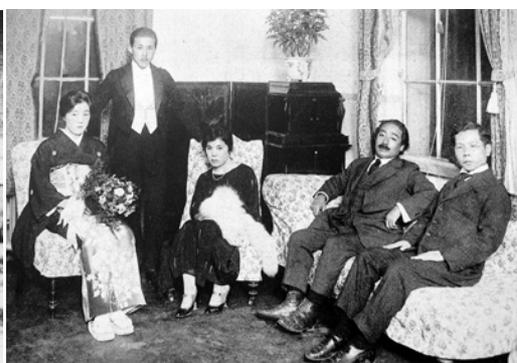
北原白秋と山田耕筈の志

山田耕筈は渡米していたカーネギーホールで自作の曲の東洋人初の演奏会を開き、大正八年(一九一九)に大成功を収めた。また、「さくらさくら」(明治二十一年の箏曲集には「桜」という題名)を日本の音楽として紹介し、世界に広がっていったのは山田耕筈の貢献である。その渡米により山田耕筈はアメリカで多くのことを学んだが、同時に日本には日本人としての歌曲が無いことを痛切に感じたという。(山田耕筈の次女日沙の証言)



カーネギーホール練習風景
(大正7年10月)

一方、明治以来、排除された「わらべうた」の中にある美しい日本語の表現を曲に乗せた歌が大変に少ないことや、日本語の副詞や助詞、句読点の使い方などについても詩人の多くは使うことがない。北原白秋は、そのことで明治以降の音楽教育に一石を投じたかと思っていた。



耕筈、白秋、三木露風(築地精養軒)



耕筈と白秋

同年五月十四日にアメリカから帰朝した山田耕筈は、築地精養軒ホテルで北原白秋、三木露風、深尾須磨子、荻野綾子らの歓迎を受けた。この時に、日本語を大切に詩作したい北原白秋と日本語のアクセントを大切に曲作りしたい山田耕筈が意気投合し常々思っていた日本の歌について夜を明かして話したという。そして、六月二十二日に赤い鳥主催の帰朝歓迎音楽会を帝劇で開催するが、北原白秋の日本の詩と山田耕筈の日本の曲で日本を代表するものを作っていこうという話しになった。その方法として、『詩と音楽』の創刊であった。

北原白秋と山田耕筈の『詩と音楽』

大正デモクラシーにより民衆による文芸は花開き、日本の民主化と共に経済格差が広がっていた。童謡は中央の子供から地方の子供たちまでの情操教育として、短い詩と音楽で豊かな情感を生み出す目的で作られた。とりわけ、詩人北原白秋と作曲家山田耕筈は日本語(言葉)と日本語のアクセント(メロディ)を語感一致(つまり一音符一語主義)を前提として歌を生み出していく。その原点となる「日本語による日本の歌を」「真純なる芸術を樹つる事」そのような思いが込められた雑誌が詩人北原白秋と作曲家山田耕筈による『詩と音楽』である。

雑誌『詩と音楽』は大正十一年(一九九二)九月に創刊したが、北原白秋は、その思いを手記に書いている。

七月初旬、アルスの弟が社の牧



雑誌『詩と音楽』

野、本沢両君同道で大元気で私の木兎(みみづく)の家に来た。さうして『詩と音楽』といふ雑誌を出したい、山田耕筈氏と二人で主幹になってくれとの事であった。山田氏となら一つ大いにやって見よう。かうした機運は既に動いてゐるのだ、よからうと答へたので、大喜びでその晩は泊って翌朝帰るとすぐ指定された原稿を方々へ願つてゐるといふ手紙が来た。実に迅速で驚いた。(中略)突然、久しぶりで口語体の自由詩が出来だした。それに氣を得て詩論の筆を取った。その半ばで一旦上京すると、山田氏にも逢つた。詩も音楽の方も予期以上に原稿が集まつてゐるので二人で狂喜した。(中略)詩と音楽はそれぞれ二人で分担責任といふ事にしたが、何にしても相互の尊敬と理解との上に立って、他の受持方面には干渉しないことにした。然し確

っかり握手した上であるから総合して一つの毅然たる有機体としてのこの雑誌を作る事は立派に可能である。私たちは非常に興奮してゐる。真純なる芸術を樹つる事に於て、二人の握手を相互に感謝してゐる。

小田原 白秋 大正十二年八月

「からたちの花」誕生

北原白秋は、大正七年三月から小田原に在住し、「雨」「あわて床屋」「砂山」などの童謡を発表していった。そして、大正十三年五月、白秋と妻菊子、二歳になつていた長男隆太郎はいつものように小田原の水之尾への道へ散歩に出掛けた。水之尾への道には、たくさんの中からたちの花が咲いていて、北原白秋は短歌を書いた。

乳母ぐるま押しつつのぼる日のくもり一木は白きからたちの花



小田原「からたちの花の小径」

童子、からたちの花が咲いたよ日盛りの山

からたちも棘の秀に乏しき葉菜を白う保ちぬ

春はま青からたちの棘の秀のすゝに冷やき眼の触りなり

この四句は水之尾への道で残している短歌。そして、北原白秋は「からたちの花」が咲いている水之尾への道で二歳の隆太郎に声をかけている。「隆太郎、隆太郎ほら、からたちの花が咲いたよ。白い白い花が咲いたよ。からたちの棘は痛いんだよ。青い青い針のような棘だよ。(中略) からたちも秋になると生るんだよ。丸い丸い金の玉のような実なんだよ。」このように話し言葉でつくられている。

その情景から、叙景と北原白秋の叙情の思いが込められた詩に仕上げ、童謡詩として「からたちの花」を書きあげた。

からたちの花が咲いたよ。

白い白い花が咲いたよ。

からたちのとげはいたよ。

青い青い針のとげだよ。

からたちは畑の垣根よ。

いつもいつもとほる道だよ。

からたちも秋はみのるよ。

まろいまろい金のたまだよ。

からたちのそばで泣いたよ。

みんなみんなやさしかつたよ。

からたちの花が咲いたよ。

白い白い花が咲いたよ。

からたちの畑やからたちのそばで泣いたのは、北原白秋が自らの過去を思い出し現在の自分の心情と重ねている。「からたちの花」について北原白秋が推敲に推敲を重ねていたというエピソードとして、鈴木三重吉の御息女すず氏が筆者に話してくれたことがある。「父三重吉は、白秋先生から雑誌『赤い鳥』七月号の原稿を

待っていました。もう期限切れで出版社へ出さざるをえず、父が、『もう白秋さんの詩は間に合わない駄目だ』と諦めていた時に、ギリギリで詩が電報で届いた。それが白秋先生の『からたちの花』の詩でした」と語ってくれた。

「からたちの花」について、北原白秋は、詩文集『緑の触覚』でこう記し、新しい詩調だと言っている。

私には私としての幼時の追憶や、小田原水之尾を見た必然的なからたちの花の縁由がある。「からたちの花」は大正十三年五月十三日の作である。妻は手記に「大変静かなよい詩で珍しい行き方、矢張りその花に即しるるからであらう。」と書いている。形式の新味は短歌長歌或は詩の五七の基調を主として取つたからである(各二行目で三三四として一音多いが)童謡で五七調を試みて、今までにない幽韻を出さうとしたのは私が始めてである。

「からたちの花」の作曲

山田耕筈にも少年時代のかたちたちの花の思いがあり、それも重なり、山田耕筈は作曲にとりかかった。元来の日本語のアクセントは長唄や口上でのリズムであり、イタリーのオペラでは無いと山田耕筈は常々思っていた。そこへ、



山田耕筰が目を通して感銘を受けたのが、「からたちの花」の詩であった。

日本語のアクセント、感情ポーズ(間)、句読点を特に考え、アウフタクト(Aufhakt・ドイツ語)の手法で曲を作りはじめた。特に、拍の頭の「か」や「さ」は低く、「よ」は高い。イタリーのオペラは拍の頭が高い、音楽学校では様々な音楽をイタリーのオペラ風に教えていたようであった。その歌い方で教わったために山田耕筰がこの「からたちの花」のレッスンでは、「先生は、何回もやり直しがあった。」と山田耕筰の弟子大谷冽子が筆者に語っている。

しかし、「からたちの花」を山田耕筰が美空ひばりに歌わせた折、一回でOKが出たと耕筰の長男耕嗣氏から筆者が聞いている。その理由は、美空ひばりは音楽学校で学んだことは無く、日本の伝統の長歌などを幼い頃から身につけていたからだだと長男の故耕嗣氏は言う。

山田耕筰は、「よ」という終助詞のアクセントを全て変えて作曲している。それは北原白秋の心情を捉えたものだ。北原白秋が、「よ」という終助詞を多く使った理由として、小田原(三崎時代からの影響)にある。小田原は特に、「よ」の話し言葉が多い。北原白秋は、小田原の漁師の言葉をよく耳にしている。小田原の方言とも関東の方

言ともいわれるが、特に小田原は「おお、そうだよ」「しらねえよ」「言えねえよ」「わかってんよ」「くだらねえよ」「行くべえよ」と何かにつけて「よ」という終助詞を使う。児童文化研究家の上笙一郎は、「からたちの花は「よ」という終助詞を詩語にまで高めた最初の作品と行ってよい」と言っている。

この詩の素晴らしいところは、からたちのそばで泣いたよ、という場面。泣くということは通常の詩では悲しくて泣くと書くが、北原白秋は、みんなみんなやさしかった、みんながやさしくて泣いたところにこの素晴らしいところがある。そこを山田耕筰は、特にやさしさを表すPPP(ピアノピアニッシモ)を使っている。

そこで、誕生した日本歌曲が「からたちの花」である。このように、北原白秋は美しい日本語を詩で残し、山田耕筰は美しい日本語のアクセントを曲で残し美しい日本の歌を目指した。「からたちの花」は北原白秋と山田耕筰の傑作であり、日本歌曲の最初の歌曲といわれている。

山田耕筰は長男耕嗣(改名前は耕二)に伝えている。

日本語は音楽に一番合っている言葉だと思う。イタリーが一番合っていると皆さん勉強しておられるが、イタリー語以上に日本語は歌に対して大変に適合した

言葉なのだ。これが解決しないと日本の国民音楽が生まれない。心が動くものが日本語ということに気付かなければならない。日本語の中に眠っている音楽的な要素を生かしてそれを音楽に再現すれば、初めて日本の楽曲が生まれてくる。詩人北原白秋もこのことに理解を示し生まれた最初の曲が「からたちの花」である。(筆者が山田耕筰の長男耕嗣氏の取材による)

山田耕筰らが目指した美しい日本の歌の文化

滝廉太郎、岡野貞一、山田耕筰という日本を代表する作曲家が目指した美しい日本の歌を継承していたのが、山田耕筰に師事していた大中寅二、成田為三、大中恩、團伊玖磨、中田喜直らの作曲家である。それは、滝廉太郎や岡野貞一の思いの継承でもあろう。また、詩人においても、北原白秋に師事した詩人は、まどみちお、与田準一、巽聖歌、佐藤義美、阪田寛夫ら日本を代表する詩人のほとんどが北原白秋の影響を受けている。

現在のJPOPといわれる音楽分野においても、日本語のアクセントそのものを曲作りとして生かしているサザンオールスターズなどの音楽にも山田耕筰の思いが受け継がれている。北原白秋と山田耕筰が目指した「詩と音

楽」、つまり、美しい日本の歌という日本人が作り上げてきた素晴らしい文化が知らず知らずにはヒット曲として受け継がれている。しかし、小田原で生まれた「からたちの花」が、音楽界において貴重な経緯を持った歌であることは一般的に知られていない。「からたちの花」が、日本の音楽の原点ともいえるであろうという歴史の事実を再考察し、小田原箱根の貴重な文化財産として、日の目をみることを願っている。

写真の所蔵権は、全て「箱根文芸の森所蔵」あるいは「竹村家所蔵」。

(著者プロフィール)

竹村忠孝(たけむらただたか) 一九五四年、小田原生まれ。法政大学大学院「国際日本学」インスティテュート」政治学専攻修了(学術修士)。関東学院大学法学部非常勤講師。作曲家の中田喜直氏に師事し、音楽史から近代社会とは何かを掘り下げ唱歌や童謡のもつ学術的意義を発信している。



小田原桐座について(九) — 桐家名跡再興公演をめぐって —

荒河 純

六、戦後の桐家名跡再興

(一) 桐家名跡保存会 木村錦花の提案

先々号において、明治に入り桐家の桐尾上が廃業し、明治十八年(一八八五)には小田原桐座は地元寺町有志による興行となり、さらに大正十二年(一九二三)の関東大震災で建物も倒壊したことで、小田原から桐家と桐座の痕跡が消滅してしまったことを述べた。

戦後、小田原桐座に再びスポットを当てたのは木村錦花である。この連載の冒頭でも述べたように、木村は戦後の神奈川県文化財調査の中でこの由緒ある劇場を見出し、当時の小田原

市長であった鈴木十郎に働きかけることで桐座研究がスタートした。これが、桐家名跡再興の動きにも繋がったのである。木村錦花は「小田原桐座の発見」の最後を以下の文で結んでいる(1)。

既に江戸三座の存在せぬ限りは、桐座の再興なぞ意義を成さない。要は桐座から引き離して、桐尾上の舞を、何らかの形式において、地元の小田原に残したい。それには、鈴木市長が熱心な指導者であることは前にも書いたが、殊に松竹の大谷社長が聞いて、イザとなつたら一臂の力をかそうと言つて居られる。他にも一二の同意者がある。我が劇界の為、強いては我が舞踊会の為にも、私

はこうした文化的の実現を今一本槍に考えて居る。

桐家名跡保存会の発足

木村錦花の「小田原桐座の発見」が出たのが昭和



十日より施行する。

会長 鈴木 十郎

木村 錦花

大橋 當俊

森 律子

圓城寺清臣

石井富之助

- 第一条 本会は桐家名跡保存会と称する。
- 第二条 本会の事務局は小田原市早川二四八番地に置く。
- 第三条 本会は日本芸能史上由緒ある桐家の名跡を文化財として再興し、長く保存管理すると共に、これを顕揚することを目的とする。
- 第四条 本会は第三条の目的を達成するため左の事業を行う。
 - 一、桐家女舞の再興ならびに存続に関する事。
 - 二、桐家名跡の継承に関する事。
 - 三、桐家所有の名義、版權、上映権に関する事。
 - 四、桐家に関する研究調査。
 - 五、その他目的達成に必要な事項。

(後略)

附則

本会則は昭和三十年十一月二

この保存会のメンバーとしては、小田原市長(元松竹歌舞伎座支配人)の鈴木十郎、小田原図書館長の石井富之助、発案者で且つ歌舞伎研究家・劇作家である木村錦花、桐家すなわち大橋家の当時の当主である大橋当俊、元帝劇文芸部員の円城寺清臣、そして帝劇女優第一期生で今回桐大蔵を襲名する森律子の六名で構成された。

桐家再興後援会の発足

桐家女舞の再現を図るべく発足した桐家名跡保存会に賛意を表し、この意義ある事業後援のために「桐家再興後援会」が、昭和三十一年二月六日に組織された。

この会の会長も市長の鈴木十郎が兼務し、副会長に山橋勝蔵、江島平八が就き、理事には小田



原市内及び周辺の有力者三十名が名を連ねている。この中には、桐座の大道具師であった中川初太郎の名前もある(3)。

(二) 桐家再興記念公演
名跡襲名の人選をめぐって

当初、発案者の木村錦花は「桐尾上の舞」の再現、再興を望むものであったが、その後江戸桐家との関係が明らかになるに従い、桐尾上に桐大蔵、桐長桐も加えた桐家女舞を再興しようということになった。しかも、小田原桐家と江戸桐家を結ぶ中心人物が桐大蔵という認識が共有されてから、先ず桐大蔵をという順序になったのであろう。

桐尾上に関しては小田原桐家の末裔である大橋当後に了解を得れば済むが、桐大蔵と桐長桐については子孫をみつけて交渉する必要があった。木村と円城寺両氏が東京で関係各方面を調べたが、江戸桐家の子孫の所在を見出すことが出来なかった。そこで、江戸桐家と小田原桐家は縁戚関係にありルーツは小田原にあると見なし、名跡保存会の考えで事を運ぶこととなった(4)。

先ずキーとなる桐大蔵を誰にするかということが問題となった。しかし、この時既に鈴木十郎市長の頭の中には「森律子」の名前があったらしい。

森律子は川上貞奴が始めた女優養成所、正式には帝劇付属技芸学校の第一期生で、昭和十九年(一九四四)に引退するまでトップ女優をつとめてきた。その後、空襲で麹町の家が焼けると、帝劇の重役で劇作家であった益田太郎(太郎冠者)の勧めで、小田原板橋の掃雲台にあった益田邸の近くに引っ越して来た。それから益田太郎が亡くなる昭和二十八年(一九五三)まで益田太郎の看病をしていた。それから二年後に小田原を離れ新橋に移っていた(5)。

この女優の草分けで且つ小田原に大縁のある女優であった森律子に白羽の矢を立てた鈴木十郎は、早速、彼女を説得している。この辺りの事は森自身が「あの世への便り」の中で次のように記している(6)。

戦争中不幸にも私は病を得て舞台から離れ、十年以上も小田原で静養する身となりました。然し最近漸く快方に向かひましたので、何か自分に出来る仕事はないかと考えて居りました折も折、丁度小田原の鈴木市長初め御関係の方々から、今度神奈川文化財に取上げられる「関東女歌舞伎の始祖桐大内蔵」の史実の調査をして居ます一緒に働きませんか、とのお話しが御座いました。まづ私としては一番御縁の深い女優の

祖先の事でもあり、私も亦長年市民としてお世話になった土地の事でもありますので、喜んで、早速お引き受けを致しました。

江戸の桐長桐は、おそらく森律子の推薦と思われるが、帝劇技芸学校第一期同期である村田嘉久子に決まった。

難航したのは桐尾上である。昭和三十年(一九五五)十二月四日付の『神静民報』によれば、「桐尾上は終始小田原に傳わったので、鈴木市長は特に小田原の関係者を熱望していたところ、はからず藤間流宗家の藤間勘十郎氏の夫人紫さんが小田原藩士の娘で、紫さんの妹の世家眞ますみさんが襲名してもよいといっている」と記されている。

しかし、世家眞ますみは約五年前に藤間勘十郎家ゆかりの名跡、世家眞流を再興して家元になったばかりで、さすがに桐家の名跡も継ぐのははばかられたと思われる。昭和三十一年(一九五六)二月七日付の『神奈川新聞』では「(桐尾上は未定)」となっているので、ぎりぎりまで人選は難航していた様子が見える。



松原神社での襲名式
前列左から木村錦花、加藤澄代、村田嘉久子、森律子

直前にやっと、桐尾上は清元の師匠で小田原在住の若榮太夫門下の加藤澄代に決まった。『都藝能新聞』昭和三十一年四月号によれば、加藤の師匠である若榮太夫が記者のインタビューに次のように答えている。「今度桐家の名を継いだ森さんも村田さんも共に舊知の方であり、また桐尾上となった加藤澄代は幼い時からの私の門弟なので、一人興味深く思います。私も北州と傀儡師の地をつとめますが、榮壽郎さんも桐尾上に厚意をもち、北州の三味線を弾いてくれるこ



「那須の与市扇的」の舞台、左から桐長桐、桐尾上、桐大蔵

とになったのは本人にとっても大いなる幸です」。

ここに若い加藤澄代を清元界の古参が支えるという体制ができたのである。

再興記念公演の成功

昭和三十一年(一九五六)四月一日、小田原総鎮守松原神社にて桐家名跡襲名式が行われた。松原神社はかつて桐家の祖である大橋政義が法楽舞を舞った場

所でもある。襲名式では、森律子へ四代目桐大蔵、村田嘉久子へ四代目桐長桐、加藤澄代へ九代目桐尾上の名が贈られた。列席者は保存会員全員および、鈴木会長夫人、清元の若栄大夫、市社会教育委員の須藤善寿であった。続いて、四月十八日、神奈川県立箱根観光会館において「小田原文化財桐家名跡再興記念公演」が開催された。主催者は神奈川県文化財協会と桐家再興後援会、協賛として小田原市と小田原市教育委員会が附いた。

桐大蔵、桐長桐、桐尾上三人の櫓が掲げられ、その両側には各劇場、劇団、新聞社、放送局、役者などから贈られた花輪がずらりと並んだ。冒頭、主催者である神奈川文化財協会長の古宇田実、桐家名跡保存会長の鈴木十郎の挨拶に続いて、早稲田演劇博物館長の河竹繁俊、松竹株式会社社長の長谷竹次郎各氏が祝辞を述べた。

プログラムは、

この公演のために作られた木村錦花作詞、杵屋六左衛門作曲、藤間勘十郎振付による長唄「那須与市扇的」が桐大蔵、桐長桐、桐尾上によって披露された。

この「那須の与市扇的」は、天明四年(一七八四)に桐座が市村座に代わって控櫓として初興行して以来、相伝の舞として長く伝えられたが、いつの頃からか絶えていたもので、今回の再興記念公演にあたり木村錦花が新たに作詞した。馬揃、扇づくし、扇的、総踊りの四段から成っている。なお、馬揃で唄われた「のどかなるひばりの声よ、春風よわがのる駒の鈴のひびきよ」は佐々木信綱の作である。

続いて桐尾上による清元「北州千歳寿」、泉徳右衛門による「梅の栄」、花柳輔夫による「傀儡師」が演じられた(7)。

また、この公演には、森律子の短歌の師である佐々木信綱が舞台上に立ち、お祝いの歌を朗詠した(8)。

玉くしげ二たびかざす舞扇
花のよそひに春日かがよふ

また、森律子は桐大蔵を襲名するにあたり次の二首をのこしている。(6)

すぐれつる其わざをぎを慕ひつつ
桐のはな房末ながかれと

相伝の桐家のまひのあふぎのまとい
ひらくも嬉し春の舞台に

このように、何から何まで一流の顔が揃い、華々しい記念公演となったのである。この公演は昼の部、夜の部の二回行われ、会場を埋めた数百の観客はただ忽然としてその美しさと上品な演出に魅了されたと記録されている。

名跡その後

こうして、桐家の名跡は小田原の地に存続することになったわけであるが、再興記念公演以降、再び公演が行われる事は無かった。記念公演が華々しいものであっただけに、逆に継続することが難しくなったのかもしれない。

そのうえ、名跡再興を牽引した方々が次々と世を去ったためである。記念公演が行われた昭和三十一年(一九五六)の四年後の昭和三十五年(一九六〇)八月に木村錦花が八十五歳で他界し、翌昭和三十六年(一九六一)七月には森律子も亡くなった。更に、昭和三十八年(一九六三)七月に大橋当俊、昭和四十四年(一九六九)七月には村田喜久子が亡くなっている。そして、昭和五十年(一九七五)五月に会長であった鈴木十郎が亡くなったことで、

桐家名跡保存会も終焉を迎えたと思われる。

桐尾上を襲名した加藤澄代は小田原で活動を続け、昭和四十年には泉流の泉直代を襲名して小田原市民会館で披露公演を行っている。その後も「直代会」を主催して小田原で活動。泉直代の泉流舞踊としての公演活動は昭和五十六年頃まで記録があるが、その後の動向は不明である。

また、円城寺清臣と親交のあった長唄七世家元松島庄十郎の夫人である大澤房代が、ぜひ桐家名跡を受け継ぎたいという。名跡保存会で協議の結果、江戸時代の『大和守日記』(本稿(二)、第二四二号参照)にある桐乙女の名を贈ることに決定した。そして昭和三十八年(一九六三)四月一日松原神社で襲名式が行われた。

その後二代目桐乙女こと大澤房代は東京で桐名義の門下生を育て、毎年「椿の会」を開催していた。昭和四十年(一九六五)四月二日付『神奈川新聞』に、二代目桐乙女の門下生六人に松原神社で桐家の名が贈られたことが報道されている。これらは、桐乙葉、桐富葉、桐若葉、桐紅葉、桐一葉、桐双葉という新しい命名であった。

おわりに
本稿をもって、「小田原桐座に

ついて」の連載の筆を置きたい。これまで著された、松隈匡輔(『小田原の史実と伝説』)、木村錦花(『小田原桐座の発見』)、石井富之助(『神奈川県史』)、中根賢(『小田原市史』)らの著作を下敷きにしながら、幾つかの新事実と多少なりとも新しい解釈を加えることが出来たと自負している。

しかしながら未だわからないことも多く、私自身も調査を続けて行く所存だが、新たに研究の担い手の出現も期待されるところである。

最後になりましたが、本稿全体を通じて貴重な資料提供とアドバイスをいただきました、小倉優子氏と石井敬士氏には厚く御礼申し上げます。

註

(1) 木村錦花「小田原桐座の発見」『神奈川県文化財調査報告』第12集、神奈川文化財協会、一九五四年

(2) 「桐家名跡保存会会則」小田原市立図書館「青蛙荘文庫」所蔵

(3) 「桐家再興後援会趣意書」小田原市立図書館「青蛙荘文庫」所蔵

(4) 石井富之助「小田原の桐座」『神奈川県史』各論編三、一九八〇年

(5) 高野正雄『喜劇の殿様・益田太郎 冠者伝』角川叢書、二〇〇二年

(6) 森律子「あの世への便り」『青淵』第九二号、一九五六年

(7) 「小田原文化財・桐家名跡再興記念公演プログラム」小田原市立図書館「青蛙荘文庫」所蔵

(8) 『神静民報』昭和三十一年四月十

九日、一九五六年

*なお、本稿に用いた写真は全て、小田原市立図書館「青蛙荘文庫」所蔵のものを複写して用いた。

小田原史談会 平成29年度定期総会・講演会のお知らせ

平成29年度の「小田原史談会定期総会」と「歴史講演会」を、下記の日程で開催します。会員におかれましては、ぜひご出席下さるようご案内申し上げます。

なお、「歴史講演会」には会員以外的一般の方も聴講できますので、お知り合いの方にもご案内頂き、多数ご参加頂けますようお願いしております。

記

定期総会

日時：平成29年5月6日(土) 午後1時開会
場所：小田原市民交流センター 1階 第1・第2会議室
(UMECO～小田原駅前 旭丘高校前)

- 議題：
- 1 平成28年度事業報告
 - 2 平成28年度事業報告年度決算報告
 - 3 平成29年度 事業計画(案)
 - 4 平成29年度 予算(案) 他

講演会 午後2時開講

演題：「後北条以前の小田原」
～政治、社会状況からみる鎌倉・室町時代の小田原地域～
講師：野村 朋弘 京都造形芸術大学 准教授(日本中世史)

終了 午後5時(予定)

二宮尊徳と『論語』(一)

寺子屋石塾主宰

岩越 豊雄

はじめに

小学校の校庭に、薪を背負いながら本読む二宮金次郎像を見かけます。読んでいる本は、四書の内の一つ『大学』といわれます。四書とは儒学の経典『論語』『大学』『中庸』『孟子』です。寸暇を惜しんで働きながらも学ぶ、二宮金次郎のように有れという願いを込めた、子供への形見本の像です。

また、金次郎の綽名の一つに「ぐるり一遍」というのがあります。白で米搗き、糠を落とすために、ぐるり一周しながら『論語』一遍を覚えたということから来ています。金次郎は子供のころからよく『論語』や『大学』などを素読していたということです。

二宮尊徳の教えをまとめた、福住正兄の『二宮翁夜話』や斎藤高行『二宮先生語録』、富田高慶『報徳記』には、尊徳翁が弟子達に語る教えの至る所で『論語』の章句が引用されています。子供の頃、素読暗唱した古典をいかに実践に生かしていたかがよく分かります。ここでは、尊徳翁が『論語』

いうつもりで学んでいきたいと思えます。

神儒仏一粒丸

ところで、尊徳翁の語録に、神儒仏一粒丸という言葉があります。神道、儒教、仏教の良い所を混ぜて取り入れ、人に役立つ丸薬として生かすということです。

そして、こう述べています。「神道は開国の道、儒学は治国の道、仏教は治心の道」であると。神道は国を開いてきた道であり、儒教は国を治める道であり、仏教は心を修める道であるということになります。神道は民族救済、儒教は社会救済、仏教は個人救済という言葉もあります。登り口は違いますが、行き着く先は人々の救済という事では共通しています。

尊徳翁は先ず、『二宮翁夜話』で神道についてこう述べています。「神道は開闢の大道、皇国本源の道なり、豊葦原を此の如き瑞穂の国の安国と治めたまひし大道なり。」

「神道とは天地が開けて以来の人のふみ行うべき正しい道であり、天皇を中心とする、この国の

大本の道である。豊かに葦が生い茂る原を、このような豊かに稲が実る、安らかな国として治めなされてきた根本の道である。」

農村の再生という事で、取り組んだ尊徳が中核に据えたのが、稲作農耕を基盤とする神道であったという事です。

尊徳と仏教の出会いには十四歳の時、飯泉観音で行脚僧の読経を聞いた事です。大変分かりやすい経文に感動し、「今、唱えられた御経は、何ですか」と尋ねたところ、観音経を呉音ではなく、和訓で唱えたのだと言う。金次郎は稼いだばかりの銭二百文を差しだし「わずかばかりの志ですが、どうか、もう一度唱えてほしい。」と願い、再度唱えてもらったと言います。

早速、経文から学んだことを栢山の善栄寺の和尚に語ると、和尚はその捉え方の深さに感動し、この寺を継いで僧になるように勧めました。しかし、「私には祖父から継いだ家を興し、その霊を安んずる使命があります。」と言い断ったという話があります。

「念彼観音力」という言葉があります。観音様を念ずると、即時に救済に来てくださるという教えです。これは法華経観世音菩薩普門品二十五にあります。それは「あらゆる必要に応じて救済に趣く宇宙遍在の生命力を表象したもの」だとも言います。

岡本かの子の「観音経を語る」

にこうあります。たとえば、手を切った時、痛いと感じる。それは、意識しない「念彼」です。するとすぐ血が出て、やがてかさぶたが出来、治ります。それは自分で治したわけではありません。將に生命力の働きです。また、母親が赤子を抱いて眠っている時、赤子が急に泣けば、空腹か、おしめが濡れたのかを直ぐに感じ取り、母親は乳房を赤子の口に宛てがいます。無意識ですが間髪を容れずです。それも、元を正せば、宇宙の生命力の働きだということになります。二宮金次郎も観音経に、そのような宇宙に遍在する生命力の働きを感じ取ったのかもしれない。尊徳翁の道歌に、

飯の身をもとのあるじにかし
わたし民やすかれと願うこの
身ぞ

とあります。「もとのあるじ」とは、宇宙の根源的な生命の働きの元と言っているかと思えます。

近江聖人と言われた中江藤樹も、「天の生成化育の徳が親を通して顕現している。それに感応する赤子敬愛の心が孝の元である」と述べています。

泣けば、すぐに乳を赤子にたてる母親の行動は、まさに天の生成化育の徳が親を通して顕現していると言えます。その母乳も自分で作ったわけではありません。内在する生命力の働きです。

仏教の經典『観音經』と、儒学の藤樹の教えは、表現の違いはありますが、宇宙に遍満している生命力という点では共通しています。まさに、神儒仏一粒丸と言いう事ができます。

今、一部の過激な教徒の動きではありませんが、イスラム教とキリスト教が激しく対立し、宗教戦争のような様相を呈しています。キリスト教もイスラム教も根は同じですが、互いに一神教という事で、自分達の宗教が絶対だということに対立するのです。

これからの世界に平和を齎すのは、二宮尊徳のいう、すべてを一円に融合する、神儒仏一粒丸の教えにイスラム教とキリスト教を加え、神儒仏回基一粒丸という柔軟な宗教観が世界に広がることなのかもしれません。

このように神儒仏を一粒丸とした二宮尊徳の語録には、神道、儒学の四書、仏教に言及したところが多々あります。その中で、今回は『論語』にしほり、「二宮尊徳と『論語』」という事でまとめました。

温故知新

ところで、『二宮翁夜話』には、こうあります。

「氷となりたる経書を世上の用に立てんには、胸中の温気を以てよくとがして、元の水として用いざれば世の潤沢になら

ず」

「古典の言葉は水のようなもの、そのままでは、世の中を潤すことができない。自分の心の熱で水を温めて水にし、世に循環させて役に立つようにするのが本當の学問だ。」と言っています。

また、『論語』為政篇十一に、次の言葉があります。

「故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知れば、以つて師と為す可し。」

「古典を学び、其の中から今に生きたる新たな智慧を知ることが出来る人であれば、人の師となることのできるのだ。」という意味です。「温(たず)ねる」とは「温める」という意味にも通じます。まさにこの「温故知新」の精神を尊徳翁は解りやすく解説しています。また、そこから、新しい智慧を無限に汲み出せるのが古典『論語』でもあります。

ここでは、『論語』を二宮金次郎(尊徳)がどう生かしたかを学び、今に生かすという視点で、共に学びたいと思います。

学びて時に之を習う

先ず『論語』開卷学而篇第一章は、学ぶという事からはじまります。

子曰く、学びて時に之を習う、亦説(よろこ)ばしからずや。朋

遠方より来たる有り、亦樂しからずや。人知らずして慍(いかに)らず、亦君子ならずや。

先生がおっしゃった。学んだ時に、よくおさらいをする。それが自分の身についたものになつてくる。なんと悦ばしいことではないか。心知る友が遠くから尋ねてきてくれ、お互いに磨き合うことができる。なんと楽しいことではないか。人が認められなくとも怒らない。なんと志の高い人ではないか。

大和言葉の「学ぶ」は「まねる」に由来します。「習」は巢の上で雛鳥が翼を動かして飛び方をならつてゐる字形と言つて説が有ります。親の羽ばたきをまねて、雛鳥が巣立ちするための羽ばたきの練習を繰り返す。つまりおさらいをするということです。その雛鳥がある日突然巣立ちをする。初めて飛べた時は、小鳥であっても悦びを感じているに違いありません。

何事も学び練習することによつて初めて出来るようになった時の悦びはよく覚えています。例えば、顎を引き、力を抜いてと先輩に学び、練習し、フワッと水に浮いて泳げるようになった時の悦びも今でも体が覚えています。

このように、小さなことでも、わかつた、出来た、やり遂げたと

いう成功体験の積み重ねが、子供達を意欲的にし、それが自信につながり、何事にも積極的に取り組む子供達を育てることになるのです。

自分に自信が付き、積極的になれば、友達も自然にできます。共に語り合い、学び合い励まし合うことができる心知る友達が訪ねてきてくれる。それは本當に楽しいものです。人生の楽しみこれに過ぎるものはありません。

アメリカの心理学者マズローは人間の基本的欲求の一つに「承認の欲求」ということを言っています。人が認めてくれる、評価してくれるということは、何時でも幾つになつても嬉しいものです。しかし、いくら出来るようになっても、向上しても人が認めてくれない時もあります。それでも怒つたり、不足をいつたりしない。そうできる人は、ほんとうに志の高い優れた人だということです。そこには人が認めてくれなくても、自分が向上する確かな悦びが有るといふことです。「学び」と「友」と「不足を思わない」この三つのことは、学ぶ悦びということとで一貫、関連しているのです。

ここでは、「学ぶ」ということを現代の子供達の状況を踏まえて解説しました。もともとは、当時の書籍であつた詩経や書経などを学ぶこと、行いを慎み相手を敬う礼儀や、葬祭などの儀式を

進める形や方法などを習うこと、また、心を和らげる音楽を学び習う悦びと、それを磨きあう朋友との交流の楽しさを言ったのだといえます。

孔子自身、自分ほど学ぶことが好きなる者はいないだろう「丘(孔子の名)の学を好むに如かざるなり」(公治長篇二八)というほど学ぶことが好きでした。その孔子の徳を慕い、遠くからも大勢の人達がやってきました。また、孔子は理想の政治の実現のために、いろいろな邦を遍歴しましたが、用いられることは有りませんでした。それでも不足を思わず、人としての道を楽しんだ。ということ、この章に孔子の一生が簡潔にまとめられているという説もあります。学ぶ習うことの悦びの積み重ねによって、人としての向上を目指す『論語』の開巻にふさわしい章です。

「姉は弾き弟(おとと)は『論語』巻之巻」という江戸時代の川柳があります。巻之巻とは、この学而篇第一のこの章句です。習い始めた姉の弾く琴の音、それを意味づけるように「学びて時に之を習う」と弟が『論語』の巻の一を素読する声が、交じり合って、家の外に聞こえてくる。子供達が習い事をする江戸時代の、のどかな家庭の雰囲気伝わってきます。江戸時代には『論語』の素読が川柳になるほど、一般的だったと

いうことでしょう。

明治維新の成功の基盤は、このような家庭や寺子屋や藩校での『論語』などの古典の素読によって、子供の時代から培われた国語力や、人としての規範、倫理力の基盤が有ったからだと言えます。

二宮金次郎(尊徳)も、「学びて時に之を習う」ことを常に実践した人です。前にも触れましたが、石臼で米糠を落とすために、ぐるり一周するたびに『論語』一遍を覚えたという、金次郎の「ぐるり一遍」という綽名からも、金次郎は『論語』を繰り返し素読し、学んでいくことが分かります。

二宮尊徳の語録などには、よく『論語』が引用されていることから、子供の頃、素読した『論語』の教えを良く身に着け、実践に生かしていたことが分かります。ぜひ、現代の日本の教育の復興と活性化の為に、子供達に『論語』の素読を普及させたいものです。(つづく)



(カット：五十嵐祐子)

旅のつれづれ俳句日記

剣持芳枝

いよいよ京都市行き出発、早朝のひかりで楽しい旅のはじまりだ。桜の花も咲きはじめて暖かな季節、身も心も浮き浮きするような気分だった。句友のMさんと十一時半には京都市着。その頃はまだあった駅ビル内の料亭吉兆で上品な味に舌つづみを打ち満足した。

バス乗場で人に聞きながら予定していた光悦寺に行った。その昔桃山江戸時代初期を代表する総合芸術家の本阿弥が、家康より領地を与えられ晩年を過ごした庵、のちに寺としたのだった。茶室や庭園の光悦垣は有名なのだそうだ。先に見学していた夫婦連れの人が写真を撮って下さった。お天気はよかったが急に小雨に降られ、バスを乗りつぎ三時頃には国際ホテルに着いた。夕食は隣の全日空ホテルの中華料理店にて二人で好きな物を頼み分けあっていた。国際ホテルでは夜に池の中の舞台で舞妓さんの踊りが見られ、素晴らしい京の夜だった。

翌朝目が覚めたら、窓の正面から真赤な太陽が上りはじめていた。今日もバスを乗りつぎ嵐山へ。京都の桜は遅いのか嵐山が春霞にけむったように見え、如何にも春の京の風情だと感じられた。渡月橋のせまい道を人力車が過ぎて行った。レストランでお昼の松花堂弁当をいただいた。

嵐山からバスで帰る時丁度太秦撮影所の前で降りる人があり、私達も久しぶりなので降りて見物することにした。その日は映画撮影はやってなかったが、よく出来たセットの高い山から、怪獣がすごい姿で現れてちよつと怖かったが面白かった。

最後の日もお天気で今回は天候に恵まれ幸せだった。ホテルの傍の二条城に行くことになった。小学生の社会見学の集団が賑やかで、広い廊下のうぐいす張りの音があまり耳に入らなかった。

バスの日乗車券を使って四条河原町へ行き、鍵善のくずきをいただき満足した。ホテルに戻り荷物を受け取りバスで京都駅へ。六時の発車まで大分時間があり、三日間の楽しかった旅の思い出が頭をよぎり、本当に幸せだったと誰れにもなく感謝したのである。

くずきりの暖簾ゆらめく祇園かな

あたたかや錦小路に湯葉買うて

片岡日記 昭和編(九)

片岡 永左衛門

昭和三年二月

廿一日 晴

午后三時発にて熱海野田氏洵席ニ出席。石田安五郎先生方ニ立寄、九時発にて帰宅。

廿二日 晴

外郎氏往訪。六時より国府津洵席ニ出席。九時半帰宅。

廿四日 晴風

竹内笹雄氏来り旧城内を写真す。

廿五日 晴風

普撰最初の総撰擧。成跡(續)一昨日発表なり。當町居住の候補鈴木英雄、平川松太郎式氏當撰せり。今回は戸別訪問禁止之為メ各派共ニ予想付さり。土地ニ居住ハ至大の關係有るものにて鈴木氏は小田原の得票四分八厘、平川氏ハ土地の居住なるも他所者ノ為メカ三分五厘。他ノ候補ニ散票ハ一分七厘の割合なり。

廿六日 晴

府中村千代の布目瓦出土の地ハ一部の字を觀音面と称し飯泉觀音の旧地なりとの傳説有るも移転せし飯泉より曾て何等出土の土器も無し。是れは千代より移転せしは事実な(る)へきも出土の瓦より推考すれば其旧地觀音面等は其以前師長國廳に關係し、後の国分寺に准する定額寺に類し敷地も觀音面より北町南畑に及ひたる大寺の跡に堂宇を建立し、道鏡又は其他の者の觀音等を安置せしなるへく思わる。其

研究に午前七時半の氣(汽)車にて鴨宮にて下車、円宗寺に至れハ幸に住職も居合セ同道し字觀音面にて布目瓦一片を得たり。其地内にハ無縁となりし宝經塔(宝篋印塔)式の墓碑の幾組も一ヶ所に積有りしと見たり。夫より村役場前の火見槽下にて数個の布目瓦幾片と其他を拾ひ福原氏ニ立寄り、帰途曾我の梅林を見しに、最早盛は已にすぎ残花點々として白きのみ。

またくと過ぎしはくやし来て見れば

かほりもうとし梅の林は

畔傳に栢山停車場に出て小田原急行電車にて帰る。

廿七日 晴

銀行に行き雑談に時を過し、一昨々日の写真版を竹内氏より受取り直に焼に遣す。

廿八日 晴

小田原町役場より答令にて左の通り回答す。小田原石ハ風祭村(今大窪村)と入生田村今大窪村の村境の邊なる東海道路の北方に、風祭村宝泉寺山より切出し来り加工シタルモノニテ、此石質も上側ハ柔かく中に切下るに随ひ質堅く、江戸芝増上寺の石階にも使用シタルカ、柔き処にてハ石燈籠の火袋を作り、又ハ加工せず江戸へ出せし事も有り。事実ハ風祭宝泉寺山石ナルモ小田原石と唱へたり。猶此堅石も柔き石も石塔等其他にも使用したり。小田原邊の古き石塔ハ多く是を用ひたり。

役場よりは左之通り

小庶取第五五号

昭和三年二月二十三日

片岡永左衛門殿

小田原町長

小田原石ノ由来ニ関スル件

今回別紙之通り東京帝国大学名誉教授呉秀三氏より照會有之候ニ付テハ御記憶ノ範圍ニ於テ其ノ由来御回示相成度此段及照會候也

拜啓、突然乍ら寸楮呈仕候。小生儀東京帝国大学名誉教授ニ御座候処、此度元禄四年長崎より江戸ニ参府仕候蘭人ケンブユルト云人ノ紀行ニ付取調中ニ御座候処、其中小田原ニ関シテ小田原石ト云フ石ノ記載有之、小生ニ取り誠ニ分り兼候次第有之候ニ付御取調煩度御願申上候儀ニ御座候。右紀行中箱根ヲ過キテ小田原ニ参り候途中石垣山城山ナトヲ見テソレヨリ風祭村ノ東ニテ左へ道ハ高キ邱山に向ヒ其ノ岡ニハ石ヲ切出し居リテソレヲ小田原石ト云ヒ江戸ニ送り出シテ火ノ壺ヲ作ルト記シ有之候、小田原石トイヒテ火ノ人物ニスルモノ昔カ今カ御地ヨリ出テ候也。火ノ壺トハ火消費力竈(ヘツツイ)カ何カ火ニ關係アルモノト存候。或人申候ニハ御地ノ近郊ニ多古ト云フ所アリテソコヨリ多古石ト云フ石出テ、耐火性ノ物ノヤウナル由ニ御座候。就テハ甚タ恐入候得共小田原石多古石又ハ類似ノ石ニツキ(右紀行中ノ文字ニ相當ノ石ニツキ)由来又事実御回答被下候ハ、誠ニ難有次第第二御座候。敬具

呉 秀三

昭和三年二月廿二日 小田原町役場御中

昭和三年三月

一日 晴曇

午后より上京。

二日 雨

午前大橋先生往訪、午后高木仙藏先生往訪、幸

ニ在宅ニテ淘友數十冊贈らる。

三日 晴風

午前若江先生往訪、帰途青山会館ニ水戸志士遺墨展覧を見る。

四時、三輪善之助氏往訪。石垣山、千代、沼田より出土の古瓦の時代ニ付鑑定を乞しニ拙者之意志と大差ナシ。

四日 晴

親一方出立、急行ノ電車にて帰宅。俄ニ春色浮動す。

霞みても残りし雪のあと消へて

野末に遠く見ゆる山の端

午后、一藤木氏淘席ニ兩人出席。帰途は空曇りて少し寒し。

五日 雪

夜来降雪。本年の大雪にて正午なるも不止。終日の降雪火桶を抱き曾て見さりし刻々変化の雪景をたのしむ。

城の森りはひと日造りの雪の山

めくれる堀の水もをのこして

住なれしねくとも今日は迷ひてか

雪ふるそらを鳥の飛びゆく

六日 晴

午前八時停車場ニ至る。萬目の白雪、野も山もなし。

箱根山ふしもひとつに行く水の

みとりをのこす雪の白妙

平塚にて下車。自動車に乗替、女学校前に至る

に、積雪の為メ夫より車は不進。止を不得下車なせしに下駄にては歩行出来ず進退谷(きわまりて瀬戸氏の家宅は遙に望み見れとも是より停車場ニ引返し大磯岸岡氏淘席ニ出席、四時半帰宅。

七日 晴

八日 晴

午后より大蓮寺ニ行く。

九日 晴

尾崎ニ行く。夕刻より風寒く又雪。維(ママ)維新史料ニ書状出す。

十日 雨

午后六時より大蓮寺淘席。

十一日 雨

理髪し尾崎ニ寄る。老人誕生日にて赤飯を貰ふ。昨年ハ大病なりしニ蘇生して如何ニも目出度し。

十二日 時々雨

十三日 半雨

十四日 半晴

(午)后五時発にて熱海淘席ニ出席。石田氏止宿。

十五日 晴

熱海より帰宅。午后兩人ニテ国府津嶋田家淘席ニ出席、五時帰宅。

本日維新史料編纂局より明治小田原町誌式冊返却し来る。片岡文書ハ未タ返却し来たらす。

十六日 晴

午後七時より外郎淘席。

十七日 晴

板橋青木濱次郎方ニ至り所蔵の弘治、元龜、大正、其他の古文書を見る。

十八日 晴

記念協會史蹟見学として(午)前六時半乗車。大森にて下車。待間暫く會員追々参集。今ハ白井米二郎氏の邸内なる米人モール(モース)氏の発見したる貝塚を見て茶菓の馳走となる。大森停車場より池上に乗車、本門寺ニ至り特建に偏入ノ五十(五重)塔、仁王門を見て同寺の庭園松涛園にて記念撮影して日蓮上人の墓所、池上宗中の墓を拝す。池上氏の墓ハ近來修繕し遺憾にも旧時の墓石に新ニ墓石を加へたる形蹟あり。後年ニ至り此不調和之為メ全部をも疑なく場合なきか注意すへき事なり。狩野探幽其他の墓も拝す。筆塚等碑銘も長文の為メ文字小さく浅刻となり、未だ式百余年なるに不明の文字あり。建碑をなさむとする者ハ考へき事と思はる。門前にて中食し新田神社を拝す。昔日の矢口ハ是より六里も上流なる矢野口なりとの説有るも、社殿の新田義興墓所と稱する小丘より古刀等も出土しと聞ハ當時戦死者を埋し地か、又戦死の附近に必ずしも埋葬すへきとも限らされハ敢て偽跡とも断定は早計なるへきか。神官の談ニ数年前より所在を失ひし社宝国光の銘ある小刀の両断せしを漸々発見し大きす物ながら、昨日再び神社ニ納りしも見たり。又徒歩して堤に出れば今日ハ彼岸の入にて近來珍らしく暖気にて風も無ければ寺に賽する者こ、かしこにて草を摘む者も甚た賑し

水ぬるむ川のつ、みのこ、かしこ

草やつむらん人の賑きはふ

六合村古川の安養寺に至る。本尊薬師脇侍弥陀
 釋迦三尊を開扉すれば、是ハ平安末期とも見ゆ
 る名作にて今踏査の好収穫にて、此以前に或る
 美術家か一度拝観したるも未だ発表せざりし
 ハ美術史家二ハ時期の来る迄ハ秘密に附する
 の風習有る。夫は是わと思も研究を重ね確定す
 る迄ハ自己の眼識を疑る、の恐れあると、去り
 とて他人に発表さる、も遺憾のためなり。今回
 の如く多人数にて拝観すれば秘密になし不能
 のみならず萬一他より他より(ママ)時代に於て
 異議有るも一人の責任にもあらざれば或る程
 度迄は會にて発表すると喜び居たり。出て門前
 に在る九州式の板碑(拙者の命名)を見る。九
 州邊には多きも関東にハ甚た稀有の由、特に拙
 者の研究にはよき参考となれり。六合停留所よ
 り蒲田に乘車し梅園の聖蹟を拝し同所より乗
 車し八時帰宅す。

十九日 晴
 玉瀧坊全寺の事蹟調査の為量覚院二山木義元
 を往訪。帰途居神社二立寄古碑と同社所蔵の掛
 佛を見る。

廿日 晴
 西光院事蹟調査二蓮上院を往訪。

廿一日 晴風
 堤氏往訪。

廿二日 晴風 昨日に引替少し寒し。
 吉川講社前社長長坂先生一年祭執行二参列の
 為メ前七時発急行電車二乗る。十一時二祭典了。
 十二時半新宿発電車二乗る。足柄にて下車、久
 野東泉院二曾根田文吉の會葬す。氏ハ福浦露木
 浦右衛門の四男にて小田原曾根田金物店二養

子となりしも、家運下り坂にて追々衰退し弥々
 破産なるに加へ震災にて進退谷り東京ニ移住
 し病死したり。如斯場合なれ、是非會葬と洵席
 を断り急ぎ帰郷したり。葬儀了て先年同家二長
 年公奉(奉公)し篤実温厚にて模範的の人物な
 りし久津間勝蔵に墓参したるに、彼岸中にて手
 向有りし花も青々とし心持よく四時帰宅した
 り。六時発にて国府津洵席二至り十時半帰宅。

廿三日 晴
 早朝小川氏、昨夜国府津にて気(汽)車に乗違
 の挨拶に来る。恐縮し今日ハ風邪の気味にて寝
 たり起きたり。

廿四日 晴
 午前、板橋山本に相模風土記稿返却。

廿五日 曇
 午前、松原神社村上氏往訪。

廿六日 雨
 午前大雨、若江先生御出席、御入門式人。午后
 より洵席、五時散會。

廿七日 晴
 露木真作夫婦勝代と岸よりの帰りに寄る。

廿八日 晴
 毎年の事なれとも下女少なく漸々見當り、下女
 をつれ細君上京。近頃の傾向ハ学校を出し者ハ
 銀行、役所等の事務員を望み、其他ハ下給等の
 浮き商売を好者多く、確き普通の奉公を望む者
 ハ年々少なく、本年八月給として拾五円位な
 (り)。

廿九日 曇
 尾崎二至り久々に加賀の孫に面會。

三十日 雨
 細君、東京より夕刻帰宅。

三十一日 寒雨
 終日閑居。

昭和三年四月

一日 晴
 蓮上院二至る。途中より見れハ昨日の寒氣ハ
 箱根の雪なり。不順に閉口。

さむかりし昨日の雨を今朝見れば
 箱根の山は雪のつもれる

庭さくらつほみに色は見へながら
 箱根の山につもる白雪

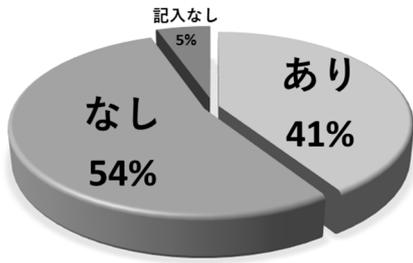
二日 晴
 暖氣を増す。午后加奈子東京より来る。夕刻一
 藤木老母兩人にて娘の礼に来る。
 四、五日前の実景よふく昨夜歌になる。

消へ残る雪かた、よふ浮雲か
 かすみ渡れる遠の山のは

三日 雨
 四日 晴
 午後より一藤木洵席。
 本年は例年より花おそく漸く咲き始む。

五日 雨
 この春は散るもながめむ庭桜
 なか／＼し日を花に暮して

図5. これまでのツアーへの参加の有無



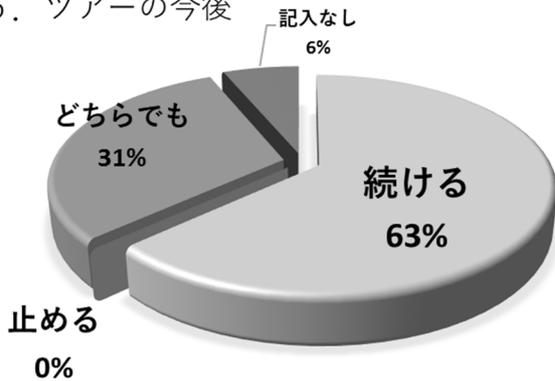
「史跡巡りツアー」に関する設問では、「参加経験なし」が「参加経験あり」を上回りました。(図5参照)

参加出来ない理由として、ツアーの「日程が合わない」が最も多く、そのほかにも「集合時間が早い」「参加費が高い」などのご意見も頂きました。

日程に関しては、出来るだけ人出の多い時期を避けての計画を心がけておりますが、催行日が原則平日ということもあり、頭の痛い難しい問題です。

「史跡巡りツアーの今後」についての設問では、「今後も続けるべき」との回答が六三％に達し、会員各位の期待が感じられます。

図6. ツアーの今後

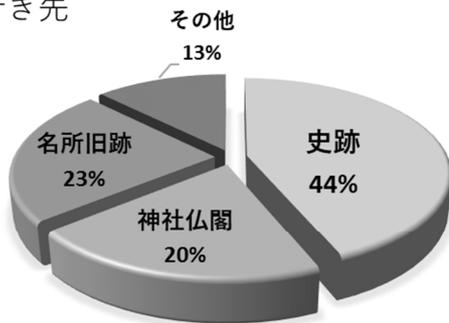


した。(図6参照)

「その他のご意見」
 様々なご意見が寄せられました。以下に生のまま並べておきます。

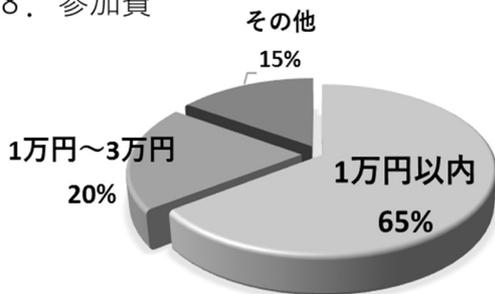
- ・一泊でも「高野山」に行きたい
- ・酒匂川の水害、治水などのツアー
- ・ブラタモリのコースを
- ・史談会らしいツアーを希望
- ・関心はあるが日程が合わない
- ・集合時間に間に合いそうにない
- ・記事に掲載された史跡等、執筆者の案内で
- ・史跡、神社などのツアー

図7. 行き先



- ・子供や孫を対象にしたツアー
- ・海外との文化交流の視点からの企画
- ・コース案内を早めしてほしい
- ・会員と非会員に会費の差があつてよいのでは
- ・少人数(十〜十五人)であれば参加できる
- ・バスはトイレが近いため一時間ごとに休憩を
- ・旅行会社のツアーと同じで、見るだけのコースが
- ・十一月は日暮れが早い十月に
- ・史談会のツアーは勉強になり充実し楽しかった

図8. 参加費



- ・年金暮らしで収入が乏しいので安い方がありがたい
- ・高齢化に伴い、壮年層(五十〜六十代)の会員の募集を積極的になかなか難しいご提案もありますが、「十一月は日暮れが早い、十月に計画を」等具体的なご意見も含めて、それぞれ役員、企画者の中で真摯に検討させて頂きます。

簡単に、(細かい項目については割愛させて頂いたものもあります)集約結果をご報告しましたが、何れにいたしましたも、予想外の多数のご回答を頂き、正直喜び、また驚いております。

今後も折に触れて、小田原史談会の活動の充実と発展のため各種の「アンケート」をお願いすることになるかと存じます。その折には、会員の皆様のご協力を頂きますよう、お願い申し上げます。(平倉 記)

行き先は氷川神社と鉢形城址

青木良一

正月も小正月も過ぎた十七日、小田原史談会の初詣バスツアーが催された。行き先は埼玉県大宮の氷川神社で、これに加えて寄居町の鉢形城址だ。

小田原駅西口集合が七時五十分。私がひとつ手前の駅のホームに立ったときに、人身事故で五十分遅れの電車が来た。その後はいつになるかわからないというアナウンスだった。出だしからラッキー。

バスは予定通り八時に出発。マイクを取った男性が、「私は添乗員ではありません、世話役の飯田です」と挨拶。次いで行程の説明があり、大宮まで二時間か二時間半という。

小田原厚木道路では、雲ひとつない空の端に富士を見つけた。富士に雪、丹沢にも雪だ。海老名PAを過ぎて飯田氏の「講義」があった。「私は団塊の世代で神様に對して失礼な言い方をするかもしれないませんが」と前置きして、「氷川神社の創建は約二千四百年前といわれます。実にいい加減です。祭神の須佐之男命と稲田姫命はめおとで、大己貴命はその子。一

家三人祀られてますから、氷川神社は家内安全・縁結びの神様となってます」といった解説から始まり、お客さんを飽きさせないようにという配慮からか「神社の雑学」をたっぷり語ってくれた。

「神宮といえば伊勢の神宮で、伊勢は『宮』でなく、『宮』の字から『ノ』を取った字を使います。『ノ』は廊下で、『ノ』がないのは建物と建物が廊下で繋がっていないことを表わしてます」と、只「へえー、そうなんだ」と言うばかり。

「初詣は明治の中頃から習慣化したもので、それは鉄道ができて人々が外へ出るようになったからです」というのには、なんとなく納得。最近十年の全国初詣人出は約二百万人でベスト9だ。

続いて、「鳥居には、構造から明神鳥居と神明鳥居があるんですよ」「お賽銭は境内に入る前に用意し、賽銭箱の前で財布を開けてはいけません。神様は財布をみて『お金がたくさん入ってるのになそれつきりしかあげない、ケチな野郎だ』と思われまますからね」「神様は個人(自分)の願ひ事は聞いて

くれません。世界や国のこととは言いませんが、せめて家族のことまでです。宝くじが当たりますようになんてもつてのほかです。お願いする

のもたいへんなんですから」「二拝二拍手一拜」というのは多くの方がご存知なんです。『拜』は九十度に腰を折ることを言います。そこまで曲げないと『拜』ではないんです」という具合。なかには「本殿の屋根の両端で交叉している千木には外削ぎと内削ぎがあって、普通は外削ぎが男の神様、内削ぎは女の神様となっています。鰹木も奇数は男の神様、偶数は女の神様です」なんて雑学の域を超えている。我々はバスの中で知識?をたんまりと仕込んでしまった。

バスは都心に入り込んだ。ピルの建て込む三軒茶屋あたりでは青空もピルの隙間から見ると感じた。あと一時間か。

利根川を渡って埼玉に入る頃には、「ほん和菓きな粉餅」が配られた。これから初詣に行く我ら一行に、ガイドの杉田さんが、「お客



スケッチ画・田中豊

さんから『末吉は吉よりいいんですか』『中吉、小吉は?』と聞かれたことがあってグーグルで調べました」と前置きして、おみくじの吉のランクを教えてくださいました。こうして、溢(こぼ)れるほどの雑学を詰め込んで大宮に着いた。

氷川神社には横っ腹の西駐車場から「侵入」したって感じですが、二キロあるという参道はどこ? せっかく来たんだからと、どデカイ二の鳥居までと、櫛並木を歩いてきた。

境内には「武蔵一宮」という文字が目につく。武蔵一宮はかつて多摩のほうにあって、ここは三宮だという本もある。江戸のころには神主が三家あって、社の本体はいずれの神さまであるのかと寺社奉行の裁きを求めたことがあった。とかく大きいところには争いがある。

バスに戻ると、飯田氏は「私は九十度でやりました」と言われた。そんな人は他にはいない。飯田氏は「拜」を業とする人の領分に入り込んだらしい。また、「千木が外削ぎで、鯉木は奇数だったから男の神様」と言っている。しつかり確認してきたらしい。

お昼は大宮駅近くのホテルでバイキング。約一時間の昼休み後、バスは寄居町に向かった。ここで飯田氏が鉢形城のおおまかな歴史の説明をされ、また北条氏邦が用いた「翁邦挹福」(きゆうほうゆうふく)という印には氏邦と於福御前の名が入っているとも言われた。

窓の外に少し白い雲が出てきたが、バスの右手に富士がよく見える。近くの席で「関越は何度も通るけど富士山見たのは初めて」という声があった。ウトウトしていたら「今度はそちら(左側)に富士山見えますよ」と言葉がかかった。田んぼの後方に葉を落とした雑木林が続いている。高速から見える風景も小田原あたりとは少し違っている。バスは高坂S.Aの先、東松山付近をひたすら進む。冬の陽差しは柔らかく、揺られてまたウトウト。次第に畑地が多くなってきた頃、荒川を渡った。右前方の榛名山にはうっすら雪があるようで、チェーン規制されているようだ。

午後二時前に寄居町に入る。ここからバスガイドの杉田さんの「口演」が始まった。「小田原と寄居町は姉妹提携都市です。下田運転手の話では『俺は去年、甲冑隊を乗せてここへ来た』と言っています。荒川の川べりで北条方と豊臣方に分かれて甲冑を着けて戦いをするんです。去年は五月八日に行われて三万人が見物したそうです」「去年は兵庫の報徳学園の生徒さんを案内して、小田原、今市をご案内しました」というに

止まらず、「あるお坊さんに教えていただいたんですけれど、梅は散るとは言いません。梅は溢れると言います。萩もそうです。それでは牡丹はどうですか、崩れると言います。椿は朽ちる、紫陽花は崩れる、朝顔は凋む。日本の言葉は本当に豊かですね。」と淀みない。この人は並のガイドさんではない。私などはメモをとっていないとこんがらがってしまう。

窓の外に「鉢形」という文字が見え始めた。陽が少し傾いてきた。杉田さんから、「みなさん、暖かい格好で見学してくださいね。暑かったら脱げばいいんですからね」とひと言あった。

鉢形城址には二時間いた。歴史館では三十分ほど館長の石井さんから説明を受けたが、館内の大きな年表に長尾氏の記述が最初の二行しかなかったのは物足り

なかったな。長尾氏でなくまた山内上杉でなく、鉢形城は氏邦あつての城って感じてしたね。

我々は三つに分かれて国指定史跡の城址を見学した。私の三班はポランテイアガイドの高橋さんの先導で、広い城址を急ぎ足気味に廻った。想像していた以上に広い。落ち葉をガサガサ踏みながら上ったり下ったり、道を渡ってまた戻ったり。川向こうを指して「この先が氏邦夫妻の墓がある正龍寺です」「あそこが藤田泰邦のいた花園城址です」と高橋さん。

長尾景春の時代の曲輪も教えてくれた。

陽が山際にかかるころ鉢形城公園を出た。一路小田原へというところを、飯田氏お勧めの嵐山P.Aで一休み。ここにはインパクト大のドクロマークのお土産「ブラックシリーズ」がワンサカあるんだという。杉田さんも、「まっくら黒ごまもち」「どくろサブレ」等々がありますよと合いの手を入れてきた。

さてと、真つ黒に期待を持ってP.Aに入ったが、言うほどのものではない。せっかくだからと証拠に「黒七味」を一つ買ったが、見ていた人に「唐辛子は赤いもん



スケッチ画・田中豊

よお」って言われちゃった。飯田氏は、「嵐山P.Aの様子はだいぶ変わりました・・・。」と残念がっていた。

圏央道から小田原厚木道路で小田原に近づく。車内で今回のバス旅行のアンケート用紙が渡され、また『小田原史談』第二四八号の紹介と「入会のお誘い」も配られた。

午後七時半、無事に小田原駅に戻る。ガイドの杉田さんの話では、小田原厚木道路の荻窪ICは午後八時から通行止で、もう少し遅かったら通れなかったという。まさか帰れないなんてことはなかっただろうけど、とにかくラッキーだったらしい。

特別賛助会員

紳士服の **アメリカヤ**

手打^{そうばん} 小田原城趾前 田毎

税理士法人 **報徳会計**

のれんと味 **爰る後**

伊勢治書店

ちん里う本店

 **かまぼこ**

割烹料理^{うなぎ} **鳥かつ楼**

(株) **オクツ薬局**

和菓子 菜の花

 **小田原ガス**

杉崎茂法律事務所

小田原報徳自動車

平井書店

かまぼこ籠 清

 **鮎屋**

かみやま小児科クリニック

株式会社 **報徳**

興電社

建築金物(株)星崎仲吉商店
家庭金物

本多時計店

学生専科  **マルク**

COMTEC コムテック株式会社

曾我の梅干^{かまぼこ} **美の政**

さがみ信用金庫

(株) **アルファ**

小田原史談(年四回発行)
創刊昭和三十六年一月
会創立昭和二十七年七月

禁無断転載

振替
年会費 普通会員三千円
〇〇二〇〇三六四三三六
小田原史談会

小田原史談会ホームページ URL <http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/>

小田原史談会

検索

落穂集

▼この三月十一日で東日本大震災から六年が経った。未だ十万人を超える人達が避難生活を強いられ、震災の爪痕は色濃く続いている。よくいわれる「時が癒してくれる」という言葉が虚しく聞こえる。癒してくれるのは無機的に流れる時間経過ではなく、やはり人々の努力の結果なのだと痛感する。▼考えてみれば、「昭和」という時代は人為的な大きな「戦争」があったが、震災という意味では比較的穏やかな時代だったと言えよう。「平成」に入ってから、阪神淡路と東日本という大震災が起こり、その後も各地で震災に見舞われ、初めてそのことに気付いた感がある。▼これまで教わった「日本史」のなかで、地震や津波などが大きく扱われることがなかったのは、大地震の狭間としての昭和という時代を反映している可能性が高い。▼そんなことを考えていたら面白い本を見つけた。金子浩之著『戦国争乱と巨大津波(雄山閣)』である。北条早雲の伊豆征服、小田原城奪取に、明応の大地震とそれに伴う大津波が深く関わっていることを、城郭発掘データと民間伝承から導き出している。歴史研究においても、時代によって見方が変われば新しい解釈が生まれる典型であろう。▼今号のトップは、長年一本釣り漁師をされてきた石井善四郎さんです。小田原弁満開の語りをお楽しみください。▼二年間にわたり連載してきた小生の「桐座」は今号で最終回です。長い間おつきあいいただき感謝します。▼次号からは、小田原周辺を深く掘り下げる新企画がスタートします。乞う御期待。(編集子)

「小田原史談」原稿募集

論考・紀行・証言等の原稿をお待ちしております。お問い合わせは左記へ。

南足柄市関本七三〇六

電話 〇四六五七三〇八七九

荒河純